23『ＢＲＥＡＴＨ』成井豊

○ジャンル／ファンタジー
○ストーリー／１２月。東京都内の劇場に勤める堀江恭子に、高校時代の同級生の赤星一馬から電話がかかってくる。一馬は「明日のニュースを見てくれ」と言う。翌日、テレビを点けると、そこに一馬が映っていた。一馬は新人作家を対象とした芥山賞を受賞したのだ。それを見て、恭子は高校時代を思い出す。一馬は恭子に向かって、「芥山賞を取ったら、僕と結婚してほしい」と言われたことを。「あいつ、まだ覚えてたのか。あれから１５年も経つのに」と呆れる恭子。ところが翌日、一馬が劇場へ訪ねてきた……。
○出演者／男５＋女７＝計１２
○上演時間／１２０分

登場人物

赤星一馬（小説家・医師）
堀江恭子（劇場職員）
亀岡七斗（劇場支配人）
波方帆奈（女優）
小林不二雄（フリーライター）
大浦明日美（劇場職員）
柿本光介（アナウンサー）
新居浜文子（保育士）
長坂武史（俳優・インストラクター）
柿本久里子（大学院生）
土居広務（演出家）

新居浜希乃（デザイナー）
松山時枝（塾教師）
松山進矢（劇場職員）
風呂木温（天使）

①二〇一五年十二月九日夜、劇場の楽屋口。堀江恭子がやってくる。手には携帯電話。

堀江　もう、お母さん、いい加減にしてよ。何回かけてきても、答えは同じ。私はお見合いなんか絶対しないからね。いい？　わかった？

別の場所に、赤星一馬がやってくる。白衣を着て、手には携帯電話。

赤星　堀江さんですか？

堀江　え？　何？

赤星　あなたは堀江恭子さんですか？

堀江　そうですけど。え？　嘘。お母さんじゃないの？（携帯電話を見る）

赤星　赤星です。

堀江　え？　何？

赤星　僕は赤星一馬です。僕のこと、覚えてるよね？

堀江　赤星って、高校の時、一緒のクラスだった？

赤星　香川県立竜王山高校三年Ｂ組、出席番号一番の赤星一馬。ちなみに、君のケータイの番号は、出席番号二十二番の観音寺淳子から聞いた。

堀江　嘘。あなた、赤ちゃん？

赤星　そう。クラスメイトからは「赤ちゃん」て呼ばれてた。僕はそのあだ名が嫌いだった。

堀江　久しぶりだね、赤ちゃん。こうして話をするのは、卒業式以来だよね？　てことは、十五年ぶりだ。で、今日は何？　同窓会のお知らせ？

赤星　その前に、今、お母さんと電話中だったんじゃないの？

堀江　違う違う。ついさっき電話を切って、またすぐにかかってきたから、てっきり母かと思っちゃって。

赤星　お見合いするの？

堀江　しないしない。母は「三十過ぎたら売れ残りだ」って言うけど、今はそんな時代じゃないよね？

赤星　よかった。僕は何とか間に合ったみたいだ。

堀江　間に合ったって、何のこと？

赤星　十五年前にした約束、覚えてる？

堀江　約束？

赤星　卒業式の後、第二体育館の柔道場で話をしたよね？　二人だけで。

堀江　それは覚えてるけど、約束なんかしたっけ？

赤星　したよ。僕が「結婚してほしい」って言ったら、君は「私たち、まだ十八だよ。いくら何でも早すぎる」って言って。「じゃ、いつならいい？」って聞いたら。

堀江　ああ、あれ。

赤星　思い出したんだね？

堀江　うん、まあ。でも、あれはただ、思いつきを口にしただけで、約束したわけじゃ。

赤星　明日の昼過ぎ、テレビのニュース番組を見てくれ。僕の名前が出る。
堀江　ニュースに？　あなた、何かしたの？
赤星　僕は約束を果たしたんだ。じゃ、また電話する。
堀江　あ、ちょっと待って。赤ちゃん！
赤星　その呼び方はやめてくれ。次からは「赤星くん」て呼んでほしい。じゃ。
堀江　赤ちゃん？　じゃなくて、赤星くん？　赤星くん？

赤星のそばに、風呂木温がやってくる。赤星・堀江が去る。

風呂木　東京に来るのは久しぶりでした。すぐに帰る予定だったんですが、ちょっとしたアクシデントがあって、しばらく滞在することになりました。もちろん、毎日仕事をしましたよ。でも、空いている時間は東京中を歩き回りました。行く先々で、いろんな人たちに出会いました。今日はその人たちの話をお聞かせしましょう。二〇一五年十二月十日。クリスマスまで、あと十五日。

②十二月十日朝、病院の病室。柿本久里子がベッドに座っている。そこへ、長坂武史がやってくる。手には花束。

長坂　おはよう、久里子ちゃん。
久里子　武史さん。わざわざお見舞いに来てくれたの？　でも、私、今日退院するってメールしたのに。
長坂　読んだよ。でも、君の顔がどうしても見たくて。おなかはもう何ともないの？
久里子　痛みは取れた。お医者さんの話だと、軽い胃潰瘍で、手術の必要はない、薬

長坂　だけで治るって。
久里子　原因はやっぱり過労？
長坂　この一週間、泊まり込みで実験してて、あんまり寝てなかったの。君が勉強熱心なのはよく知ってる。でも、君に何かあったら、ご家族が悲しむ。もちろん、僕だって。だから、二度と無茶はしないって約束してくれ。
久里子　わかった。
長坂　じゃ、僕は仕事があるんで。あ、これ、お見舞い。（花束を差し出す）
久里子　ありがとう。（受け取って）武史さん、あなたにお願いがあるの。
長坂　何だい？　僕にできることなら、何でもするよ。
久里子　私と結婚してください。
長坂　結婚？　でも、僕らはまだ付き合い始めたばかりなのに。
久里子　私にはわかったの。あなたとなら幸せになれるって。
長坂　でも、君はまだ学生だし、僕だって自分一人の食い扶持を稼ぐのに精一杯だし。いや、それ以前に、十二も年上だし。
久里子　だったら、どうして私と付き合おうと思ったの？　まさか、私の体が目当て？
長坂　そんなわけないだろう！　まだキスもしてないのに！
久里子　今のは冗談。あなたは私が今まで出会った人の中で一番誠実な人。だから、結婚したいの。

病院の廊下。新居浜文子・新居浜希乃がやってくる。

新居浜　ねえ、希乃、今の婦長さんの話、聞いてた？　あなたの絵、額に入れて、談話室に飾ってくれるって。

希乃　ちゃんと聞いてたよ。最初はうれしかったけど、だんだん心配になってきちゃった。だって、プロの画家が見るかもしれないし。

新居浜　別にいいじゃない。あの絵は本当によく描けてる。それに、あなたはここで一年も過ごしたんだもの。何か恩返しをしないと。

希乃　一年か。あっと言う間だったな。

新居浜　このまま真っ直ぐ家へ帰る？　それとも、どこか行きたい所はある？

希乃　行きたい所？

そこへ、柿本光介がやってくる。

柿本　（新居浜に）すみません。七〇七号室はどちらでしょう？

新居浜　七〇七ですか？　だったら、この先を右に曲がって、三つ目です。

柿本　左に曲がって、四つ目ですね。

新居浜　違います。右に曲がって、三つ目です。

柿本　わかりました。そんなことより、あなたのお名前は？

新居浜　名前？　どうして名前を聞くんですか？

柿本　いきなりこんな話をしても、信じてもらえないかもしれませんが、あなたは亡くなった妻によく似てるんです。瓜二つと言っていい。

希乃　お母さん、行こう。

柿本　（新居浜に）待ってください。僕はけっして怪しい者ではありません。

そこへ、風呂木がやってくる。

風呂木　お母さん、用事は済みましたか？
新居浜　ええ。（柿本に）じゃ、私たちは先を急ぎますので。
柿本　そう言わずに、お名前を教えてください。お願いします。
希乃　お母さん、答えない方がいいよ。
柿本　（新居浜に）そうか。人に名前を聞く時は，まず自分の名前を名乗るべきですよね。僕の名前は柿本光介です。テレビ明後日でアナウンサーをしています。この顔に見覚えはありませんか？
新居浜　私、テレビは見ないので。
希乃　私も見ない。
風呂木　今はテレビよりネットの時代ですよね。じゃ、行きましょうか。
柿本　（財布から名刺を取り出して）ちょっと待ってください。せめて名刺を受け取ってください。

新居浜・希乃・風呂木が去る。反対側へ、柿本が去る。そこへ、松山時枝・松山進矢がやってくる。

時枝　あー、バカバカしい。三日も検査して、異状なしだなんて。私の寿命はあとちょっとしか残ってないんだよ。無駄にした三日を返してほしいよ。
松山　でも、久しぶりにのんびりできたんじゃないの？
時枝　とんでもない。入試まであと二月じゃないか。さあこれからって時に、三日も塾を閉めちまって。うちの生徒たちのことを考えたら、居ても立ってもいられなかったよ。
松山　塾、いつまで続けるの？

時枝　決まってるだろう？　死ぬまでだよ。塾は私の生き甲斐だからね。
松山　でも、僕も就職して、給料がもらえるようになったし。
時枝　おまえが今日まで生きてこられたのは誰のおかげだい？　私が塾で稼いできたからだろう？
松山　そのことは本当に感謝してるよ。そうだ。おばあちゃん、何かほしいものはない？
時枝　私に何か買ってくれるのかい？
松山　もうすぐクリスマスじゃないか。何でもほしいものをプレゼントするよ。
時枝　今、何でもって言ったね？
松山　でも、あんまり高いものは無理だよ。車とかマンションとか海外旅行とか。
時枝　当ててごらん。
松山　え？
時枝　問題です。私が今、一番ほしいものは何でしょう。
松山　おばあちゃんて、人に問題を解かせるのが本当に好きだね。
時枝　今、腹の中で「意地悪ババア」って思っただろう？　それで結構。人は問題を解くことで成長するんだ。私は死ぬまで問題を出し続けるからね。

時枝・松山が去る。
病室。久里子がベッドに座っている。そこへ、柿本がやってくる。

柿本　久里子、準備は出来てるか？
久里子　もちろん。別に荷物もないし、迎えに来る必要はなかったのに。
柿本　帰る途中で、また具合が悪くなったらどうする。それより、その花はどうし

久里子　た？　誰か、お見舞いに来てくれたのか？
柿本　まあね。
久里子　一体誰だ。友達か？　ゼミの仲間か？　まさか、ボーイフレンドってことはないよな？
柿本　お父さん、私、結婚することにした。
久里子　そうか。じゃ、お父さんもそうしようかな。お母さんが亡くなって十二年になるし。今、なんて言った？
柿本　だから、私は結婚するの。この花束をくれた人と。
久里子　いきなり何を言い出すんだ。おまえはまだ二十三だろう。いくら何でも早すぎる。
柿本　お姉ちゃんは二十五で結婚したよね？　大して違わないじゃない。
久里子　しかし、あまりに突然すぎる。お父さん、おまえに彼氏がいるなんて、全然知らなかった。
柿本　付き合い始めたのは、先月だからね。
久里子　ということは、たった一月で結婚を決めたのか？
柿本　お父さんはいつも言ってるよね？　お母さんと初めて会った時、この人だと思ったって。私も同じだったの。お父さんがどんなに反対しても、絶対に結婚するからね。

①十二月十日夕、劇場の事務所。大浦明日美が椅子に座っている。そこへ、堀江・亀岡七斗がやってくる。

亀岡　ただいま。

大浦　あれ？　ゲネプロ、もう終わったんですか？

亀岡　役者たちのノリがよくてね。最後の通し稽古より、六分も短くなったよ。（携帯電話を見て）一時間五八分五九秒。

大浦　凄い。ついに二時間を切ったじゃないですか。しかも一分以上も。

亀岡　始まる前に、土居くんが役者たちを集めて、こう言ったんだ。「二時間を超えると、トイレに行きたくなるお客さんが出てきます。お尻の痛みが耐えられなくなるお客さんも出てきます。みんなの力で、二時間を切りましょう」

大浦　それ、支配人がいつも言ってるセリフじゃないですか。

亀岡　土居くんはもともと上演時間にはこだわらない人だったんだ。洗脳するのに、一カ月もかかったよ。

大浦　で、肝心の芝居の出来は？

亀岡　稽古より断然よかった。堀江さんは今日、初めて見たんだよね？

堀江　今年、うちの劇場でやった芝居の中でも、一、二を争うおもしろさでした。初日が開いたら、予約の電話がジャンジャンかかってくると思います。

亀岡　うれしいことを言ってくれるじゃないか。そうだ。フェイスブックにゲネプロの報告を書いておこう。（パソコンに向かう）

堀江　大浦さんも一緒に見ればよかったのに。

大浦　私は初日を見ます。お客さんの反応が知りたいんで。

堀江　（大浦の机の上から雑誌を取り上げて）あら、結婚情報誌？　あなた、まさか。

大浦　違いますよ。結婚の予定は今のところありません。

堀江　でも、こういう雑誌を買うってことは、そろそろって思ってるんじゃないの？

大浦　そりゃそうですよ。私も来年で三十だし。あ、ごめんなさい。

堀江　私のことは気にしなくていい。で、大浦さんの彼氏って、いくつだっけ？

大浦　三十二です。結構大きな編集プロダクションに勤めてて、見た目もカッコよくて、性格も優しくて、私なんかにはもったいない人です。

堀江　つまり、大浦さんは結婚する気まんまんてわけだ。

大浦　付き合い始めて二年になるし、いい加減、そういう話が出てもおかしくないと思うんですよね。彼にはそれとなく仄めかしてるんです。「私、来年、三十だよ」って。

堀江　クリスマスの予定は？

大浦　まだ何も決まってません。私は本番があるし。

堀江　本番が終わった後に会えばいいじゃない。それまでに、雰囲気を盛り上げるのよ。彼がプロポーズしたくなるように。

大浦　わかりました。頑張ります。

亀岡　（パソコンを見ながら）おっ、今年の芥山賞が発表になったぞ。『八方美人にさよならを』って小説だ。二人とも、聞いたことある？

大浦　いいえ。作者はまたタレントさんですか？
亀岡　違う。赤星一馬って人だ。
堀江　赤星一馬？（亀岡のパソコンを見る）
亀岡　どうしたんだ、堀江さん。君にとって、芥山賞の行方はそんなに重大な関心事だったのか？
大浦　ひょっとして、堀江さんの知り合いなんですか、その赤星って人。
堀江　そうかと思ったんだけど、別人だった。ああ、ビックリした。
大浦　（亀岡のパソコンを見て）でも、この人、なかなかカッコいいじゃないですか。『八方美人にさよならを』か。試しに読んでみようかな。

そこへ、松山がやってくる。

松山　支配人、波方さんがお呼びです。急いで楽屋へ行ってください。
亀岡　え？　ダメ出しはもう終わったの？
松山　いや、その前に、波方さんが土居さんと話し始めちゃって。二人ともどんどんエキサイトしちゃって。
亀岡　冗談じゃない。あと三時間で初日の幕が開くのに。行ってくる。

亀岡が去る。

松山　支配人も大変ですね。毎日毎日、波方さんのお守りで。
大浦　仕方ないのよ。土居さんの反対を押し切って、波方さんをキャスティングしたのは、支配人なんだから。

松山　そうなんですか？　でも、どうしてあんな人を。
大浦　松山くんは若いから知らないだろうけど、昔はテレビの連ドラでバンバン主役を張ってたのよ。日本人で、波方帆奈の名前を知らない人は一人もいなかった。そうですよね、堀江さん？
堀江　だって、あの人、キレイだったもの。
大浦　でも、三十を過ぎたら、人気は急降下。やっぱり、女は二十代が華よね。あ、ごめんなさい。
堀江　私のことは気にしなくていい。

②楽屋。波方帆奈・土居広務が椅子に座っている。そこへ、亀岡がやってくる。

亀岡　お待たせしました。波方さん、僕に何か用ですか？
波方　用があるから呼んだのよ。ねえ、亀岡くん。あなた、さっきのゲネプロを見て、どう思った？
亀岡　とてもおもしろかったです。芝居のテンポがよくなって、活気が出てきたし。
波方　そう？　私は自分の思い通りに演技できなくて、ずっと気分が悪かった。
亀岡　本当ですか？　僕にはそんなふうには見えなかったけど。土居くんは気付いた？
波方　演出家なら当然気付くと思ったのに、この人、「今までで一番よかった」って言ったのよ。
土居　僕にはそう見えたんだから、仕方ないでしょう。それより、さっさと本題に入ってください。
波方　（亀岡に）単刀直入に言うね。巡査の役を別の人に替えてほしい。

亀岡　え？　そんなことできるわけないでしょう。

波方　今日の初日はあと三時間で始まるから、諦める。でも、今夜中に代役を決めて、明日の昼間稽古すれば、夜の本番には間に合うはず。どう？

亀岡　そりゃ、セリフ覚えのいい役者ならできないこともないでしょうけど。でも、なぜ長坂くんを降ろさなければならないんです。

波方　それも私が言わなくちゃいけないの？　彼はセリフを三カ所も間違えた。ダンスも一カ所遅れた。ゲネプロで計四回のミス。そんな人に、舞台に立つ資格がある？

土居　どれもお客さんにはわからない、小さなミスです。降ろす理由にはならない。

波方　他の役者に与える影響は？　彼と会話して、ダンスするのは私なのよ。

土居　演技は持ちつ持たれつです。波方さんがミスした時は、彼がフォローしてくれます。

波方　私はミスなんかしない。稽古初日から今日まで、一度でもセリフを噛んだことがあった？

亀岡　ありません。波方さんは完璧でした。

波方　彼が何度ミスしても、私は耐えてきた。でも、さっきのゲネプロが限界。自分が信頼できない役者とは共演できない。亀岡くん、私は間違ってる？

亀岡　間違ってません。何もかも、波方さんの仰る通りです。

土居　亀岡さん、あなたは長坂さんを降ろすことに賛成なんですか？

亀岡　いいえ、彼は降ろしません。

波方　今、なんて言った？

亀岡　役者の降板は急な病気や怪我など、止むを得ない場合のみに許される。それ以外の理由で降板させたら、それはお客さんに対する裏切り行為になります。

波方　お客さんの中には、彼を見に来る人もいるんですから。

亀岡　それは彼の知り合いだけでしょう？　お客さんはお客さんです。とにかく、彼は降板させません。これがこの芝居のプロデューサーである僕の結論です。

波方　亀岡くん、私は納得できない。

亀岡　波方さんのお気持ちはよくわかります。そこで、土居くんにお願いがありまして。波方さんのためにも、他の役者のためにも、彼に二度とミスをさせないでください。役者の演技を向上させるのは、演出家の役目です。

土居　わかりました。今から彼と稽古してきます。（波方に）それで納得してくれますか？

波方　彼の演技に向上の余地があるのかしら。

土居　楽しみにしててください。

土居が去る。

亀岡　帆奈さん、あんまり無茶なことを言わないでくださいよ。

波方　私は自分の気持ちを正直に口にしただけよ。

亀岡　とか何とか言っちゃって、本当は土居くんを苛めたかったんでしょう？

波方　わかった？

亀岡　このタイミングで役者の交替なんかできるわけない。そんなことは、いくらワガママな帆奈さんだって、当然わかってる。

波方　ワガママは土居くんの方でしょう？　新進気鋭だか何だか知らないけど、ステージングにばっかり頭を使って、役者の演技はほったらし。だから、みん

な平気でセリフを噛むのよ。

亮　みんながみんな、帆奈さんのようにはできませんよ。

波方　ずいぶんお世辞がうまくなったじゃない。

亮　お世辞じゃありません。僕は、帆奈さんが他の誰よりも努力していることを知っています。

波方　うまいよ。本当にうまい。さすがに一つの劇場を任されるだけのことはあるね。初めて会った時は、敬語の使い方も知らない若造だったのに。

亮　芸能プロダクションに就職して、最初に担当した女優さんに鍛えられたんです。

波方　あの使えないマネージャーがここまで出世するとは思わなかった。その女優さんにはくれぐれも感謝しないと。

亮　ありがとうございました。（頭を下げて）じゃ、僕は土居くんの様子を見てきます。あ、そうそう。終演後に初日乾杯をしますけど、帆奈さんはソフトドリンクにしてくださいね。アルコールはＮＧですよ。

波方　言われなくてもわかってるよ。

①十二月十日夜、劇場の事務所。堀江が椅子に座っている。そこへ、大浦がやってくる。

大浦　ただ今、開場しました。
堀江　いよいよあと三十分で開演か。お客さんの出足は？
大浦　十人くらいかな。せっかくの初日なのに、入りはよくて七割でしょうね。
堀江　そうか。でも、今日見たお客さんが宣伝してくれて、明日からはもっと増えるよ。
大浦　だといいんですけど。それより、支配人は？
堀江　奈落。土居さんが長坂さんの稽古をするって言い始めて、相手役は支配人がやることになって。
大浦　なぜ支配人が？　そんなの、松山くんにでもやらせて、お客さんのお出迎えをするべきじゃないですか？
堀江　でも、支配人は台本が全部頭に入ってるから。
大浦　ひょっとして、稽古に夢中になって、開場したことに気づいてないのかも。私、呼んできます。

そこへ、松山がやってくる。

松山　堀江さん。
大浦　松山くん、どうして戻ってきたのよ。受付にいてくれって言ったでしょう？
松山　わかってます。でも、堀江さんにどうしても会いたいって人が来てまして。
堀江　私に？　誰だろう。
松山　男の人ですよ。堀江さんと同じ年頃の。
大浦　嘘、彼氏？　私、聞いてない。
堀江　彼氏なんかいない。（松山に）わかった。すぐに行く。

そこへ、赤星がやってくる。

赤星　堀江さん。
堀江　赤ちゃん？
赤星　香川県立竜王山高校三年Ｂ組、出席番号一番の赤星一馬。ちなみに、君がこの劇場で働いていることは、出席番号二十六番の坂出美紀から聞いた。
堀江　何しに来たの？
赤星　もちろん、君に会いに来たんだ。昼過ぎのニュース、見てくれた？
堀江　うん、まあ。
赤星　感想はそれだけ？　おめでとうぐらい、言ってくれないの？
大浦　あの、堀江さん。
堀江　ごめん、赤星くん。今、仕事中だから、話はまた今度にしてくれない？
大浦　待ってください、堀江さん。その人は、芥山賞を受賞した、赤星一馬さんですか？
松山　え？　芥山賞？

赤星　（大浦に）候補になったのは初めてだったので、まさか受賞できるとは思ってませんでした。

大浦　え？　じゃ、本物なんですね？　凄い！

松山　どうしてそんな人がここに？　堀江さんとはどういう関係なんですか？

堀江　高校の同級生。

大浦　それだけ？

堀江　それだけ。赤星くん、頼むから、今日は帰って。仕事が終わったら、必ず電話するから。

赤星　（チケットを出して）僕は客だよ。客を無理やり追い返すの？

大浦　そんなことするわけないじゃないですか。どうぞごゆっくりお楽しみください。

赤星　（堀江に）芝居が終わったら、劇場の外で待ってる。

堀江　私はその後も仕事があるのよ。

赤星　何時間でも待ってる。今日は君とどうしても話がしたいんだ。

赤星が去る。

大浦　堀江さん、これは一体どういうことですか？　ただの同級生だなんて、絶対信じませんよ。そうでしょう、松山くん？

松山　当たり前じゃないですか。「君とどうしても話がしたいんだ」。この気合の入り方はただごとじゃありません。

大浦　（堀江に）一体二人の間に何があったんですか？

堀江　何もない。

大浦　どうして隠すんですか。私は私の彼氏のこと、全部話したのに。
堀江　何もないから、話のしようがないの。二人ともよく聞いて。赤星くんと会うのは高校の卒業式以来。卒業してから十五年間、一度も会ってないのよ。
大浦・松山　本当ですか？
堀江　どうして信じてくれないの？

そこへ、亀岡がやってくる。

亀岡　三人ともここで何をしてるんだ。
松山　聞いてください、支配人。今ここに芥山賞作家の赤星一馬が来て――――
亀岡　有名人の一人や二人で大騒ぎするんじゃない。早くロビーへ行きなさい。
松山　はい、ただ今。

松山が去る。

大浦　長坂さんの稽古をしてたんですよね？　成果は上がりましたか？
亀岡　やるだけのことはやった。後は天に祈るしかない。
大浦　ついでに、公演の成功と大入り満員も祈りましょう。
亀岡　（祈って）よし、出陣だ。

亀岡・大浦が去る。

②駅。風呂木がやってくる。

風呂木　新居浜希乃さんは「鎌倉へ行きたい」と言いました。僕はいきなりの遠出には反対だったんですが、希乃さんの熱心な訴えにほだされて、渋々許可しました。でも、行って、正解だった。希乃さんは見違えるほど、元気になった。お母さんも喜んでいました。そして、再び電車に乗り、東京へと帰ってきました。

そこへ、新居浜・希乃がやってくる。

新居浜　お待たせしました、風呂木さん。歳を取ると、お手洗いが近くなっちゃって。

風呂木　別に構いませんが、電車はたった今、発車したところです。ホームで待つのは寒くないですか？

新居浜　私は全然。希乃も平気よね？

希乃　当たり前じゃない。風呂木さん、今日はこんな時間まで付き合ってくださって、ありがとうございました。

風呂木　いえいえ、僕も海へ行くのは久しぶりだったので、とても楽しかったです。で、この後は真っ直ぐ自宅へ？

希乃　ええ。たくさん歩いて、母も疲れただろうから。

新居浜　あら、私はまだまだ大丈夫よ。

風呂木　初日から無理をしない方がいいですよ。じゃ、僕はここで失礼します。また明日。

風呂木が去る。

新居浜　よかったね、行きたかった所へ行けて。
希乃　まあね。でも、お母さんや風呂木さんには悪いけど、私はやっぱりあの人と行きたかった。
新居浜　だったら、風呂木さんの言う通り、しっかり訓練しないと。
希乃　わかってる。家に帰ったら、早速始める。

そこへ、柿本がやってくる。

柿本　驚いたな。こんな所でまた会えるなんて。今からお帰りですか？
新居浜　ええ、まあ。
柿本　僕もついさっき仕事が終わったところで。今日は寄り道しなくてよかった。
新居浜　テレビに出てる方が電車を使ったりして、大丈夫なんですか？
柿本　アナウンサーはタレントじゃない。ただの会社員です。毎日電車で通勤してますよ。そんなことより、あなたはどちらにお住まいですか？
希乃　お母さん、答えちゃダメだよ。
新居浜　わかってる。（柿本に）そんなことを聞いて、どうするんですか？
柿本　別にどうもしません。僕はただ、帰る方向が一緒だったら、うれしいなと思っただけで。ちなみに、僕は総武線の西荻窪です。
希乃　まずいよ。完全に同じ方向だ。
新居浜　（柿本に）すみません。私、ちょっと寄る所を思い出したので。
柿本　え？　電車には乗らないんですか？

そこへ、小林不二雄がやってきて、柿本にぶつかる。柿本がよろめく。小林が柿本の財

布を掏る。

小林　すみませんでした。いきなりぶつかって。
柿本　いや、こちらこそ。

小林が去る。

新居浜　（柿本に）大丈夫ですか？
柿本　いや、ご心配なく。それより、よかったら、僕の名刺を受け取ってください。（内ポケットを探って）あれ？　あれ？
新居浜　どうしました？
柿本　財布がないんです。確かにここに入れたのに。（他のポケットを探って）まずいな。定期も入ってるのに。
希乃　ひょっとして、今、ぶつかった人に。
新居浜　掏られたって言うの？　まさか。
柿本　どうやら、そのまさかです。あの男、どっちへ行きましたか？
新居浜　今から追いかけても、無駄ですよ。
柿本　しかし、財布がないと、僕は家に帰れない。
新居浜　よかったら、いくらかお貸ししましょうか？
柿本　いや、今日初めて会った方にそこまで甘えるわけには。
希乃　お母さん、人が良すぎるよ。
新居浜　困っている人を見過ごすわけには行かない。（柿本に）まずはこの駅の事務務室へ行きましょう。事情を説明して、定期を再発行してもらわないと。あ、

そうそう。私の名前は新居浜文子です。

僕は柿本光介です。初めまして。

柿本

柿本・新居浜・希乃が去る。

①十二月十日夜、喫茶店。赤星・堀江が椅子に座っている。

赤星　まさか二時間も待たされるとは思わなかったよ。

堀江　今日は初日だったから、終演後に関係者一同で乾杯をしたの。

そこへ、風呂木がやってくる。手にはカップを二つ載せたトレイ。

風呂木　いらっしゃいませ。

赤星　僕はコーヒー。

堀江　（風呂木に）私も。（赤星に）待たせておいて悪いけど、ここにはあと十五分しかいられない。電車がなくなるから。

風呂木　どうかごゆっくりお過ごしください。

風呂木がカップを置いて去る。

赤星　あの人もああ言ってることだし、電車のことは忘れよう。帰りはタクシーで送るから。

堀江　ずいぶんお金持ちなのね。やっぱり、小説家って儲かるの？

赤星　それはベストセラーを出したらの話だよ。僕はまだ新人だから、小説だけでは食べていけない。別に仕事を持ってる。

堀江　どんな仕事？

赤星　サラリーマンだよ。それより、昨日の話の続きだけど。

堀江　十五年前の話でしょう？　赤星くんは約束だって言うけど、私はそうは思ってなかったのよね。

赤星　そう言うだろうと思って、当時の日記を持ってきた。（日記を出して）ここにあの時の会話が克明に記録されてる。（日記を読む）「結婚してほしい」「私たち、まだ十八だよ。いくら何でも早すぎる」「じゃ、いつならいい？」「あなた、小説家を目指してるんだよね？　だったら、あなたが芥山賞を取ったら、結婚してあげる」。これは明らかに約束だよね？　違う？

堀江　それはそうかもしれないけど、どうして今頃になって、そんな話を持ち出すわけ？

赤星　十五年もかかったけど、僕は芥山賞を取った。約束を果たしたんだ。だから、君も約束を果たしてほしい。

堀江　それって、つまり。

赤星　僕と結婚してほしい。

堀江　あなた、頭がおかしいんじゃないの？

赤星　君が戸惑うのはよくわかる。でも、その言い方はあまりにも失礼じゃないか？

堀江　だって、あれから十五年も経ったんだよ。その間、私たちは一度も会ってないんだよ。それなのに、いきなり結婚してほしいって言われても。

赤星　すぐにとは言わない。まずはお互いを理解し合うために、交際期間を設けよう。

堀江　それは無理。私には今、付き合ってる人が――――

赤星　いないよね？　ちなみに、君が一年前に彼氏と別れたことは、出席番号二十九番の多度津沙織から聞いた。二股をかけられた上に、捨てられたって。

堀江　私が捨てたの。そうやって、私に無断で情報を集めるのはやめてくれない？

赤星　君は今年で三十三だ。結婚してもおかしくない。その時は諦めようと思った。でも、君には夫どころか、恋人もいなかった。それなら、僕にもまだチャンスが残っているかもしれない。そう思って、電話したんだ。

長坂・久里子が椅子に座っている。

長坂　（久里子に）え？　あの話をお父さんにしたの？

久里子　武史さんが帰った後、三分もしないうちに父が来たんで、この勢いで言っちゃえって。

そこへ、風呂木がやってくる。手にはカップを二つ載せたトレイ。

風呂木　お待たせしました。

長坂　ありがとうございます。（久里子に）もちろん、結婚は反対されたよね？

久里子　とにかく早すぎるの一点張り。父の時代だったら、二十三で結婚なんて、当たり前なのに。

風呂木　一九八〇年、山口百恵は二十一歳で結婚しました。

風呂木がカップを置いて去る。

久里子　あの人の言う通り、二十三なら何の問題もない。そう押し切ったら、父も「とにかく一度会ってみよう」って。

長坂　僕と？

久里子　武史さん、お願い。父に会って、例のセリフを言って。

長坂　「お嬢さんを僕にください」？

久里子　そう。それからその後に、「必ず幸せにします」。

長坂　想像するだけで緊張してきちゃった。そう言えば、久里子ちゃんのお父さんて、どんな仕事をしてるんだっけ？

久里子　テレビのアナウンサー。

長坂　え？　テレビに出てるの？　アナウンサーで、名字が柿本っていうと、まさか。

久里子　「こんばんは、ニュースプラネットの時間です」

長坂　柿本光介？　君、柿本光介の娘だったの？

久里子　父はテレビではいつもニコニコしてるけど、中身はただの昭和の親父なの。一言で言えば、頑固。たぶん、最初のうちは、武史さんが何を言っても、耳を貸さないと思う。でも、挫けないで。

長坂　久里子ちゃん、僕は今の時点で挫けそうだよ。

久里子　だらしないこと言わないで。あなた、男でしょう？

長坂　でも、最近、仕事がうまく行かなくて、今日もいろんな人に迷惑をかけちゃって。情けない話だけど、僕は男としてはまだまだ半人前なんだ。そんな僕が、あの柿本光介に向かって、「必ず幸せします」なんて。

久里子　大丈夫よ。向こうは一人、こっちは二人なんだから。

長坂　頼りにしてるよ、久里子ちゃん。

②駅。波方が立っている。そこへ、土居がやってくる。

土居　あれ？　波方さん、今日は電車ですか？

波方　私は十年以上前から電車。車で送り迎えをしてもらえるほど、事務所に貢献してないからね。

土居　なるほど。それより、初日の長坂さんはどうでした？　セリフもダンスも完璧だったでしょう？

波方　まあ、何とか間に合ったって感じかな。

土居　開演直前まで稽古しましたからね。波方さんには感謝してるんです。あなたが彼を降ろせって言ってくれたから、僕も必死になれた。

波方　土居くん、あなた、何か誤解してない？

土居　誤解って？

波方　確かに初日の彼はノーミスだった。でも、それに何の価値があるわけ？　スタートラインに立ったってだけの話でしょう？（胸を押さえて）彼のセリフは私のここに全然来ない。全然物足りないのよ。

土居　わかりました。明日も本番前に稽古します。そして、必ず初日以上の演技をさせてみせます。

そこへ、長坂・久里子がやってくる。

長坂　土居さん、今、お帰りですか？

波方　お疲れさま。
長坂　あ、波方さん、お疲れさまです。今日はいろいろとご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした。
波方　私は別に。それより、そちらの女性は？　長坂くんの彼女？
長坂　ええ、まあ。
久里子　（波方に）いいえ、彼女じゃなくて、フィアンセです。波方帆奈さんですね？　私、柿本久里子です。
波方　（長坂に）初日がちょっとうまく行ったからって、もう女の子とイチャイチャ？
土居　長坂さん、明日、十時に劇場に来られますか？　巡査のシーンの稽古をしたいんです。
長坂　また稽古をしてもらえるんですか？　ありがとうございます。

そこへ、小林不二雄がやってきて、土居にぶつかる。土居がよろめく。小林が土居をいたわるフリをしながら、財布を掏る。

小林　すみませんでした。いきなりぶつかって。
土居　いや、こちらこそ。

小林が歩き出す。そこへ、風呂木がやってきて、小林の前に足を出す。小林が転び、土居の財布を落とす。

風呂木　（小林に）大丈夫ですか？（財布を拾って）この財布、落としましたよ。

土居　それ、僕の財布です。

小林が逃げようとする。長坂が小林の体を掴む。小林が長坂に殴りかかる。長坂がかわして、小林の腕をつかみ、捻り上げる。

小林　放せ！　俺が何をした！

長坂　とぼけるのはやめろ。今、その人の財布を掏っただろう。

そこへ、大浦がやってくる。

大浦　小林くん！

土居　大浦さん、この人はあなたの知り合いですか？

大浦　そうです。長坂さん、その人を放してください。

波方　そういうわけには行かないのよ。あなたの知り合いは、土居くんのお財布を掏ったの。

大浦　掏った？　そんなこと、小林くんがするはずありません。

波方　でも、私たちは見たのよ。その人が土居くんにぶつかって、その後すぐに転んで、手からお財布を落としたのを。

土居　（財布を拾って）これは確かに僕の財布です。

長坂　（小林に）どうだ？　自分がやったことを素直に認めるか？

小林　わかったわかった。（長坂に）認めるから、腕を放してくれ。

大浦　小林くん、これは何かの間違いだよね？　あなたが掏摸なんかするはずないよね？

小林　明日美、ごめんな。
大浦　小林くん！
長坂　（小林に）駅の事務室に行こう。土居さんも来てください。
久里子　私も行きます。

長坂が小林の腕をつかんだまま去る。後を追って、土居・久里子も去る。

波方　（大浦に）あなたは行かないの？
大浦　私は。

反対側へ、大浦が去る。波方が長坂たちの後を追って去る。

風呂木　小林不二雄くんは駅の事務室から最寄りの警察署に連行されました。天網恢恢粗にして漏らさず。悪事を働く人間には必ず天罰が下るということです。まあ、僕は足をちょっと引っかけただけですが。それにしても、心配なのは大浦明日美さんです。彼女の気持ちを考えると、胸が痛みます。そして、一週間後の十二月十七日。クリスマスまで、あと八日。

①十二月十七日夕、劇場の事務所。堀江・大浦が椅子に座っている。そこへ、亀岡がやってくる。手には新聞。

亀岡　二人とも見てくれ。読振新聞に劇評が載ったぞ。

堀江　読振の演劇担当って、今治さんでしたよね？　あの人、初日に見に来たのに、一週間も経ってから？

亀岡　まあまあ、文句を言う前に、中身を読んでごらん。（新聞を差し出す）

堀江　（受け取って）「今年最高のクリスマス・プレゼント」。

亀岡　絶賛だよ、絶賛。これでまたチケットの売れ行きが伸びるぞ。

堀江　初日こそ七割の入りでしたけど、一日ごとに着実に増えてます。私が予言した通りになりましたね。

亀岡　大入り満員の日は近い。そうだ。フェイスブックに読振の報告を書いておこう。（パソコンに向かう）

堀江　（大浦に新聞を差し出して）凄いよ。土居さんのこと、「これからの演劇界を担う演出家」だって。

大浦　（受け取って）本当だ。

堀江　どうしたの？　最近、元気がないみたいだけど。彼氏と喧嘩でもした？

大浦　してませんよ。おかげさまで、うまく行ってます。

堀江　じゃ、プロポーズはしてもらえそう？
大浦　それはまだわかりません。彼は今、仕事で海外に行ってるんで。
堀江　それで元気がなかったんだ。でも、クリスマスまでには帰ってくるんでしょう？
大浦　だといいんですけど。

そこへ、松山がやってくる。

松山　支配人、ちょっとテレビを点けていいですか？
亀岡　テレビ？　うちの芝居が何かの番組で取り上げられるのか？
松山　そうじゃなくて、堀江さんのお友達が出るんです。テレあさの「光介の部屋」に。（リモコンのボタンを押す）
堀江　友達って、まさか。

テレビ局のスタジオ。赤星・柿本が椅子に座っている。

柿本　今日のゲストは、芥山賞を受賞した新進気鋭の小説家、赤星一馬さんです。赤星さん、受賞おめでとうございます。
赤星　ありがとうございます。
柿本　早速ですが、赤星さんが最初に小説家になろうと思ったのは？
赤星　子供の頃から本を読むのが好きで、いつかは自分も書きたいと思ってたんですが、本気でなろうと思ったのは、高校三年の時ですね。
柿本　何かきっかけがあったんですか？

赤星　同級生の女の子と約束したんです。僕が芥山賞を取ったら結婚しようって。
柿本　その約束を十五年かけて、果たしたわけですか。さぞかし、素敵な方なんでしょうね。
赤星　それはもう。歳は僕と同じ三十三なんですが、高校時代から全然変わってません。今は都内の劇場に勤めています。
柿本　で、結婚のご予定は？
赤星　そのことについてはちょっと問題がありまして。
柿本　問題って何ですか？
赤星　彼女が結婚を渋ってるんです。まあ、十五年も待たせた僕にも責任はあるんですが。
柿本　しかし、あなたは約束を守って、小説家になったんだ。ここで挫けちゃダメですよ。
赤星　そうですよね、柿本さん？
柿本　そうですよ、赤星さん。彼女が好きなら、どこまでも突っ走るんです。

劇場の事務所。堀江が松山からリモコンを奪い、ボタンを押す。

松山　堀江さん、なぜ消すんですか。
堀江　仕事の邪魔だからよ。（新聞を差し出して）これ、コピーして、楽屋の掲示板に貼ってきて。
亀岡　堀江さん、今、赤星さんが言ってた同級生って、君のことだよね？
堀江　違いますよ。
亀岡　でも、歳は三十三で、都内の劇場に勤めてるって。

松山　（堀江に）あの人、初日から毎日芝居を見に来てますよね？　あれって、やっぱり、堀江さんに会うためだったんですね？

亀岡　堀江さんが結婚を渋るから、何とか自分の気持ちをわかってもらおうと。

松山　健気な人だなあ。

堀江　何が健気なもんですか。テレビであんな話をするなんて、あまりに勝手すぎる。あれじゃ、まるで私が約束を守らない裏切り者みたいじゃない。柿本も柿本よ。「挫けちゃダメですよ」なんて、無責任なこと言いやがって。

亀岡　堀江さん、落ち着いて。

堀江　確かに約束はしたかもしれない。でも、今は全然好きじゃないんだから、結婚なんかできない。

そこへ、土居がやってくる。

土居　亀岡さん、ちょっと楽屋に来てもらえますか。

亀岡　楽屋？　波方さんがまた何か言い出したんですか？

土居　その通りです。僕がいくら言っても聞かないんで、ぜひ助太刀をお願いします。

亀岡　（堀江に）行ってくる。

亀岡・土居が去る。

大浦　私、堀江さんの気持ち、わかります。赤星さんは物事を自分の都合でしか考えてないんですよね。

堀江　そう。こっちの都合はお構いなしなの。
松山　でも、赤星さんは堀江さんを十五年も愛し続けてきたんですよ。
堀江　私はそんなこと頼んでない。
大浦　そうですよ。堀江さんの気持ちを考えたら、テレビであんなこと言わない。
　　勝手すぎますよ、赤星さんは。

②楽屋。波方が椅子に座っている。そこへ、亀岡・土居がやってくる。

亀岡　波方さん、話は土居くんから聞きました。衣裳を別のものに替えたいんだそうですね？
波方　そう、これよ。（ドレスを広げる）
亀岡　高そうなドレスですね。一体どこから借りてきたんです。
波方　私の知り合いに作ってもらった。代金は気にしないで。私のワガママなんだから、私が払った。
土居　ワガママだってことは自覚してるんですね？
波方　公演中の衣裳の変更なんて、普通はやらないからね。でも、私はもともと、玉之江さんが用意してくれたドレスに不満があったの。だって、私の役は大正時代の華族の奥様なのよ。それにしてはあまりに古いでしょう？
土居　大正時代のドレスなんだから、古くていいんですよ。
波方　私はデザインの話をしてるんじゃないの。あのドレスは借り物でしょう？
　　何十年も前に作られて、いろんな芝居で使われてきた。おかげで、生地の傷みがひどいし、あちこち繕った跡があるし。
土居　そんなの、客席からは見えませんよ。

波方　でも、私には見えるの。あんなものを着て、華族の奥様になりきれって言われても無理。

土居　そんなことを言い出したら、芝居はできませんよ。時代劇の刀は普通、竹光ですよね？　でも、役者さんたちはみんな武士になりきってる。

波方　当然よ。真剣で斬り合うわけには行かないもの。でも、衣裳は？　鬘を被って、着物を着て、足袋を履くよね？

土居　着物は大抵、借り物ですよ。

波方　予算がないから、作れないのよ。でも、私は作った。お金は自分で払った。これで何も問題はないよね？

亀岡　ええ、ありません。僕は衣裳の変更に賛成です。

土居　亀岡さん、今の言葉は本気じゃないですよね？

亀岡　もちろん、本気です。逆に土居くんに聞きますが、なぜこのドレスではダメなんですか？

土居　そんなの、一目見ればわかるでしょう。このドレスは派手すぎる。舞台に立ったら、他の誰よりも目立ちます。

波方　どういうこと？　私が目立ちたいから、これを作ったって言いたいの？

亀岡　波方さん、それは誤解です。

土居　いや、誤解じゃありません。（波方に）あなたは役になりきれるかどうかなんて気にしてない。本当は自分が目立ちたいだけなんだ。

亀岡　土居くん、今の発言は明らかに侮辱です。プロデューサーとして、見過ごすわけには行きません。今すぐ取り消してください。

土居　なぜです。あなただって、本当は僕と同じ気持ちのくせに。

亀岡　土居くん。

土居　わかりました。取り消します。（波方に）失礼なことを言って、申し訳ありませんでした。しかし、衣裳の変更についてはあくまでも反対です。

波方　プロデューサーの命令に従えないって言うの？

亀岡　待ってください、波方さん。僕は賛成しましたが、衣裳のプランを考えたのは玉之江さんです。変更するなら、事前にスタイリストの了解を得ないと。

土居　（土居に）玉之江さんが賛成したら、変更を認めてくれますか？

波方　なんだ。そういうことなら、先にそう言ってくださいよ。

土居　じゃ、構わないのね？

構いません。彼女が賛成するわけありませんから。

土居が去る。

亀岡　帆奈さん、玉之江さんは間違いなく反対しますよ。

波方　でも、その時は亀岡くんが説得してくれるよね？

亀岡　しますとも。だって、これ、帆奈さんの手作りでしょう？

波方　わかった？

亀岡　ドレスを人に作らせるようなお金が、帆奈さんにあるとは思えない。これ、作るのに何日かかりました？

波方　三日。こう見えても、若い頃から洋裁は得意なのよ。

亀岡　そこまでして、目立ちたいんですか。

波方　お客さんのアンケートを読んだ？　褒められてるのは若い子ばっかり。私の名前は一枚もない。

亀岡　僕は何枚か見ましたよ。

波方　どうせ二枚か、三枚でしょう？　私はできるだけのことをやってる。それなのに名前を書いてもらえないのは、役が小さいからよ。

亀岡　でも、非常に重要な役ですよ。しかも、難しい。

波方　それを理解してくれるお客さんが何人いる？　だからと言って、私が勝手にセリフを増やすわけには行かない。それならせめて衣裳だけでもって考えたわけ。

亀岡　帆奈さんがここまでやる人だとは思いませんでした。僕がマネージャーをしてた頃は、いつも酒に逃げてたのに。

波方　私はこの芝居に賭けてるの。

亀岡　その気持ちは衣裳じゃなくて、演技にぶつけるべきじゃないですか？

波方　あなた、私の演技に不満があるの？

亀岡　とんでもない。帆奈さんの演技は出演者の中で最高だと思います。でも、僕が知ってる帆奈さんはこんなもんじゃない。もっと輝いてましたよ。

①十二月十七日夜、劇場の楽屋口。大浦がやってくる。手には携帯電話。別の場所に、小林がやってくる。手には携帯電話。

大浦　もしもし、小林くん？
小林　明日美、この前は驚かせて、すまなかったな。
大浦　私のことはいい。それより、あの後、どうなったの？
小林　警察に連れていかれて、調書を取られて、留置場に放り込まれて。ついさっき出てきたところだ。
大浦　疑いが晴れたの？
小林　そうじゃない。親父が保釈金を払ってくれたんだ。
大浦　ということは、裁判になるの？
小林　俺は現行犯で捕まった。言い逃れのしようがなかった。
大浦　ねえ、小林くん、私にだけは本当のことを言って。あなたは本当に土居さんのお財布を掏ったの？
小林　ああ。
大浦　でも、あなたは編集プロダクションに勤めてるんだよね？　毎月お給料をもらってるよね？　お金には困ってないよね？
小林　そのことは直接会って、説明する。今から会えないか？

大浦　その前に、今の質問に答えて。
小林　だから、それを説明するには時間がかかるんだよ。
大浦　だったら、イエスかノーかでいい。編集プロダクションに勤めてるっていうのは嘘なの？
小林　イエス。
大浦　あなたは掏摸なの？
小林　頼むよ、明日美。直接会って、説明させてくれ。

大浦のそばに、土居がやってくる。手には携帯電話。

大浦　ごめん、今日は会えない。
小林　だったら、明日でいい。何時なら会える？
大浦　明日も会えない。しばらく私に時間をちょうだい。
小林　明日美！

大浦が携帯電話を切って、去る。小林も去る。別の場所に、新居浜・希乃がやってくる。希乃の手には携帯電話。

土居　もしもし、希乃ちゃん？
希乃　お久しぶりです、広務さん。
土居　最後に会ったのが去年の十二月だから、ちょうど一年ぶりだよ。元気にしてた？
希乃　ええ、まあ。それより、今日の夕刊、読みました。広務さんのこと、凄く褒

めてあって、うれしかった。

土居　「これからの演劇界を担う演出家」ってやつだな？　そんなデカいもの、僕に担えるかどうかわからないけど。

希乃　広務さんなら大丈夫ですよ。私、いつかはこうなるって信じてました。

土居　ありがとう。今日はわざわざそれを言うために電話してくれたの？

希乃　いいえ、実は広務さんにお願いしたいことがあって。

土居　僕の芝居が見たいんだね？　日にちを言ってくれれば、席を用意するよ。

希乃　違うんです。私と会ってほしいんです。

土居　何のために？

希乃　私、今月の終わりに、ニューヨークへ行くんです。そこの大学で、絵の勉強をしようと思って。帰ってくるのは何年先になるか、わからないんです。だから、その前に、どうしても広務さんに会っておきたくて。

土居　希乃ちゃん、悪いけど、それは無理だよ。

希乃　一日だけでいいんです。私に時間をください。

土居　今さら会って、どうするんだ。僕らはもう恋人でも何でもない。第一、いきなり別れようって言い出したのは君じゃないか。

希乃　それでも、会ってほしいんです。

土居　正直に言うよ。僕は君には会いたくない。一年も連絡してこないで、いきなり会ってくれだなんて、虫がよすぎるんじゃないか？

土居が電話を切って、去る。

新居浜　土居さん、なんて言ってた？

希乃　「会いたくない」って。「虫がよすぎるんじゃないか」って。
新居浜　あなたのこと、まだ怒ってるのね。
希乃　仕方ないよ。私がしたことは勝手すぎるもの。
新居浜　一度断られたぐらいで何よ。また電話すればいいじゃない。
希乃　でも、広務さんて、優しそうに見えて、意外と執念深いのよ。
新居浜　単に子供なだけよ。あなたなら、きっと説得できる。挫けちゃダメよ、希乃。

②柿本の家。長坂・久里子が椅子に座っている。柿本がやってくる。手にはカップ三つを載せたトレイ。

長坂　すみません。こんな時間にお邪魔したのに、飲み物まで出していただいて。
柿本　久里子から聞いてるよ。今日も九時まで本番があったんだろう？　だったら、コーヒーよりビールの方がよかったかな？
長坂　いや、僕はお酒が飲めないんで。
柿本　そうなの？　舞台の人は酒が強いってイメージがあるけど。
長坂　僕はコップ半分が限界です。それ以上飲むと、食べたものが一気に――――
久里子　武史さん、今日はその話をしにきたんじゃないでしょう？
長坂　わかってる。柿本さん、今日は柿本さんにお願いがあってきました。お。お。
柿本　一つ目の音が「お」であることはよくわかった。二つ目に行ってくれ。
長坂　おじ。おじ。
久里子　武史さん、しっかりして。
長坂　（柿本に）お嬢さんをボキにください。
柿本　君はあまり滑舌がよくないね。「僕」が「ボキ」になってたよ。

長坂　すみません。緊張すると、口がうまく動かなくなって。
柿本　それでよく役者がつとまるな。
長坂　おかげで、いまだに舞台だけでは食べていけません。今やってる芝居でも、たくさんの人に迷惑をかけちゃって。
柿本　いっそのこと、辞めたらどうだい？
長坂　役者をですか？
柿本　君は今、三十五なんだよね？　その歳になっても、名前が売れないってことは、役者には向いてないってことだよ。
久里子　どうして断言できるの？　お父さんは武史さんの演技を見てないでしょう？
柿本　（長坂に）君は普段はスポーツジムで働いてるんだよね？
長坂　アルバイトです。久里子さんとはそこで知り合いました。
久里子　（柿本に）初めて行った時に、マシンの使い方とかいろいろ教えてくれて、それで好きになったの。
柿本　教え方がうまかったんだな？
久里子　それだけじゃなくて、とっても誠実な人だなと思ったの。
柿本　長坂くんはインストラターに向いている。だったら、そっちを本業にした方がいいんじゃないか？
久里子　そんなこと、お父さんが決めることじゃないでしょう？
長坂　久里子ちゃん、落ち着いて、お父さんの話を聞こう。
柿本　長坂くん、久里子を好きになってくれて、本当にありがとう。しかし、君が役者を続ける限り、僕は結婚に賛成できない。久里子のことが本当に好きなら、安定した職業に就いてほしい。僕の意見はこれだけだ。
長坂　わかりました。考えてみます。

松山の家。時枝が椅子に座っている。そこへ、松山がやってくる。手にはお銚子と盃を載せたお盆。

松山　おばあちゃん、お燗がついたよ。
時枝　ありがとう。やっぱり、冬は熱燗が一番だね。
松山　体の調子はどう？　今朝、何度かクシャミをしてたみたいだけど。
時枝　また誰かが私の噂をしてたんだよ。若い頃の時枝さんは原節子よりキレイだったねえ、とか何とか。
松山　ごめん、原節子って誰？
時枝　どうしてボケに対して、質問を返すのかねえ。おまえが相手じゃ、会話が全然弾まないよ。
松山　おばあちゃんに突っ込める人なんて、滅多にいないんじゃないかな。
時枝　そんなことはないよ。私が小学校で教えていた頃は、教師に歯向かう子がいっぱいいた。そういう子とやり合うのは楽しかったよ。もちろん、連戦連勝だったけど、一人だけ私を言い負かした子がいた。敵ながら天晴れと思ったよ。
松山　見てみたかったな、おばあちゃんがコテンパンにされるところ。
時枝　そんなことより、例の問題はどうした。答えは見つかったのかい？
松山　（携帯電話を出して）いくつか候補は考えたけど、どれも自信がなくて。
時枝　いいから、思いついたものを言ってごらん。
松山　おはあちゃんのことだから、きっと塾で使うものだと思うんだ。だから、電子手帳、ＩＣレコーダー、タブレット。

時枝　全部持ってるよ。試しに、塾から離れてみたらどうだい。
松山　そうか、日本酒。
時枝　バカ。目にしたものをそのまま言うんじゃないよ。少しは頭を使いなよ。
松山　でも、おばあちゃんは服もバッグも宝石も興味がないだろう？
時枝　この調子じゃ、百年かかっても当てられそうにないね。
松山　悔しいけど、降参。早めに教えてもらわないと、用意する暇がなくなるんだ。だから、教えてよ。
時枝　仕方ないね。答えは若さだよ。
松山　若さ？
時枝　六十歳なんて無理は言わない。せめて三十歳、若返りたい。小学校でバリバリ教えてた頃の私に。そうすれば今だって、もっといい授業ができると思うんだ。
松山　そんなこと言われても、若さなんてプレゼントできないよ。

①十二月十八日夕、劇場の事務所。大浦・松山が椅子に座っている。そこへ、亀岡がやってくる。

亀岡　大浦さん、波方さんの衣裳の件、円く収まったよ。
大浦　え？　波方さん、ゴネなかったんですか？
亀岡　それが、意外とあっさり了承してくれたんだ。「玉之江さんが反対なら、諦めます」って。
大浦　だったら、最初から衣裳を替えたいなんて言わなきゃいいのに。
亀岡　僕はあのドレスを着させてあげたかったんだがな。
大浦　支配人は波方さんに甘すぎます。ひょっとして、昔、何かあったとか？
亀岡　あるわけないだろう。あの人は僕より一回りも年上なんだぞ。
大浦　そうやって頭から否定するところがかえって怪しい。
亀岡　今日はやけに絡んでくるじゃないか。ひょっとして、彼氏と喧嘩したの？
大浦　してませんよ。あ、電話だ。（携帯電話を取り出す）

そこへ、堀江がやってくる。

堀江　支配人、大変です。今、劇場の入り口を見たら、お客さんが三十人も並んで

ました。

亀岡　本当か？　開場までまだ二時間もあるのに。

堀江　今日は間違いなく満員になりますよ。初日から八日目で、ついに目標達成です。

亀岡　やっぱり君の予言通りになったな。よし、今日は芝居が終わったら、みんなで祝杯を挙げよう。もちろん、僕の奢りだ。

松山　堀江さん、大変です。

堀江　そうよね。支配人の奢りなんて、滅多にないもんね。

松山　そうじゃなくて、今、ネットで芝居の評判をチェックしてたら、芸能ゴシップのサイトに堀江さんの写真が。（パソコンを示す）

亀岡　堀江さんの写真？　一体どういうことだ。（パソコンを見る）

松山　（読む）「赤星一馬の婚約者はこの女」「堀江恭子三十三歳」「香川県立竜王山高校卒業」「現在は池袋のシアタームーンライトに勤務」

亀岡　個人情報がだだ漏れじゃないか。一体誰がこんなことを。

松山　（堀江に）この写真に見覚えは？

堀江　（パソコンを見て）高校の卒業アルバムの写真。

松山　ということは十八歳ですか。堀江さん、キレイだったんですね。

堀江　過去形？

亀岡　（読む）「嘘つき」「詐欺師」「他にも約束した男がいるんじゃないの？」「こんな女のどこがいい」「クソババア」。いくら何でも、クソババアはないよなあ。大浦くんもこっちに来て、見てごらん。

大浦　すみません。今、近くに知り合いが来てて。十五分だけ、抜けてきます。

大浦が去る。

松山　（パソコンを見て）逆に、堀江さんを擁護する書き込みもありますよ。（読む）「十五年も待たせて何を今更」「堀江さん応援してます」「赤星なんかより僕と」

亀岡　まさかこんな大騒ぎになるとはな。どうする、堀江さん？

堀江　殺す。

亀岡　堀江さん、君が怒る気持ちはわかる。悪いのは、テレビで不用意な発言をした赤星さんだ。しかし、彼も悪気があったわけじゃないし。

堀江　殺す。

亀岡　松山くん、コンビニでココアを買ってきて。（堀江に）ココアにはポリフェノールが入っててね、ストレスを和らげる効果があるんだよ。

松山　行ってきます。

②喫茶店。小林・大浦が椅子に座っている。そこへ、風呂木がやってくる。手にはコップ二つを載せたトレイ。

風呂木　いらっしゃいませ。

小林　コーヒーを二つ。

大浦　私はいらない。十五分で戻るって言ってきたの。

小林　だからって、何も頼まないわけには行かないだろう。

風呂木　いえいえ。よかったら、水だけ召し上がっていってください。

風呂木が去る。

小林　変わった店だな。

大浦　そんなこと、どうでもいいでしょう？　それより、どうして劇場まで押しかけてきたの？　私は時間をちょうだいって言ったはずよ。

小林　俺はおまえに嘘をついてた。おまえが怒るのは当然だ。でも、俺には俺の事情があったんだ。

大浦　言い訳なんか聞きたくない。

小林　言い訳じゃない。俺は本当の俺がどんな人間か、おまえに知ってほしいんだ。

大浦　どういうこと？　まさか、仕事だけじゃなくて、名前も歳も嘘だったの？

小林　俺は小林不二雄、今年で三十二歳だ。ほら、免許証。（免許証を差し出す）

大浦　（受け取って）偽造じゃないよね？

小林　おまえ、俺のこと、プロの犯罪者か何かだと思ってないか？

大浦　違うの？

小林　俺の本職はライターだ。掏摸をやるのは、仕事がなくて、金に困った時だけで。

大浦　そんなの、信じられない。

小林　俺のひいじいさんは手先がメチャクチャ器用だったんだ。毎年正月にお年玉をもらって、ポケットに入れて、ふと気付くと、ない。慌てて、ひいじいさんの所へ行くと、「隙あり」って言いながら、返してくれた。で、俺もやり方を教えてもらって。

大浦　それじゃ、子供の頃から？

小林　違う違う。俺は長男だったんだけど、家業を継ぐのがイヤで、大学の途中で

家を飛び出したんだ。で、バイト暮らしをしてる時に、雑誌の編集者と知り合って、コラムとか映画紹介とか書き始めて。でも、それだけじゃ、なかなか食っていけなくて。

大浦　だからって、人の物に手をつけるなんて、最低。

小林　その通りだ。おまえが見てる前で捕まって、目が覚めた。もう二度と人の財布には手をつけない。約束する。

大浦　小林くんの家って、何屋さん？

小林　電器屋だよ。

大浦　だったら、お父さんの跡を継いで、電器屋さんになったら？　物書きになるのは諦めて。

小林　俺には無理だ。親父の会社はデカすぎる。

大浦　え？　お父さん、社長さんなの？

小林　代表取締役だよ。ハリマの。

大浦　ハリマって、日本で一番大きな家電メーカーの？

小林　俺のひいじいさんはハリマの創業者なんだ。小林羅地男。

大浦　そんな大富豪の家に生まれたのに、掏摸になったの？　許せない。絶対に許せない！

長坂・久里子が椅子に座っている。そこへ、風呂木がやってくる。手にはコップ二つを載せたトレイ。

風呂木　いらっしゃいませ。

久里子　チーズケーキのセットを二つ。飲み物は二つともコーヒー。

長坂　（風呂木に）いや、僕もやっぱりコーヒーだけで。
久里子　どうしたの？　ここのチーズケーキ、大好きでしょう？
風呂木　今日はケーキの気分じゃない。そんな日もありますよね。

風呂木が去る。

久里子　何よ、あの人。
長坂　久里子ちゃん、昨日のお父さんの話なんだけど。
久里子　昨日は本当にありがとう。「お嬢さんを僕にください」ってきっぱり言ってくれて。
長坂　いや、お礼を言われるような出来じゃなかったよ。お父さんにも、「役者には向いてない」って言われちゃったし。
久里子　あんなの、気にしなくていい。父は普段、お芝居を見ないの。武史さんの演技を批判する資格なんて全然ないのよ。
長坂　僕はお父さんの意見は間違ってないと思う。ねえ、久里子ちゃん、正直に答えてくれ。君は僕の演技が巧いと思う？
久里子　わからない。でも、役者の魅力って、巧さだけじゃないと思う。
長坂　それって、巧くないって答えたのと同じだよ。
久里子　そりゃ、主役をやるような人にはかなわないかもしれないけど。
長坂　三十五にもなって、主役どころか、脇役もできない。僕の役は端役だよ。役名だって、名字も名前もない、ただの「巡査」だ。
久里子　でも、とっても重要な役よ。
長坂　もちろん、僕だってそう思ってるよ。でも、もっと大きな役がやらせてもら

えないのも事実だ。

久里子　まさか、父の言う通り、役者を辞めるって言うの？

長坂　たぶんそうした方がいいんだろう。でも、僕は役者が好きだ。これからも続けたい。もっともっと巧くなりたいんだ。だから。

久里子　武史さん。

長坂　君と結婚はできない。ごめん。（頭を下げる）

土居・希乃が椅子に座っている。そこへ、風呂木がやってくる。手にはコップ二つを載けたトレイ。

風呂木　いらっしゃいませ。

土居　コーヒーとカフェオレ。（希乃に）あ、カフェオレでよかった？

希乃　覚えてたのね。

土居　君は夏でもカフェオレだったじゃないか。

風呂木　好きな人のことは何十年経っても、忘れないものですよね。

風呂木が去る。

土居　他の店にしようか。

希乃　ううん、ここでいい。今日はいきなり押しかけて、ごめんなさい。

土居　悪いけど、あと十五分で、ダンス返しが始まるんだ。

希乃　私の話はすぐに終わります。

土居　そうしてくれるとありがたい。もともと君に会うつもりはなかったんだ。

希乃　去年の私の誕生日に、二人で鎌倉へ行ったのを覚えてますか？
土居　渋滞がひどくて、向こうには二時間ぐらいしかいられなかった。鶴岡八幡宮と大仏を見て、おしまいだった。
希乃　私は電車で行こうって言ったのに。
土居　僕は車を買ったのがうれしくて、車で行こうって言い張ったんだ。
希乃　私、いまだに悔しいんです。せっかく鎌倉へ行ったのに、由比ヶ浜の海が見られなかったこと。私の言う通り、電車で行っていれば。
土居　一年半も前のことを、いまだに恨んでるのか？
希乃　女は執念深いんです。
土居　そんなに見たかったら、一人で行ってくればいいじゃないか。
希乃　私は広務さんと見たいんです。ニューヨークへ行く前に。
土居　でも、冬の海は寒いよ。
希乃　サーファーに我慢できるんだから、きっと大丈夫です。
土居　僕は今、公演中なんだ。夕方までには小屋入りをしないとまずい。
希乃　一緒に行ってくれるんですか？
土居　このまま一生恨まれたら、夢見が悪くなりそうだからね。

新居浜が椅子に座っている。希乃が新居浜に向かって、両手で丸を作る。新居浜が万歳をする。

①十二月十八日夜、劇場の事務所。大浦が椅子に座っている。そこへ、赤星・堀江・松山がやってくる。

赤星　（堀江に）話って何だい？　やっとプロポーズを受け入れる気になったの？
堀江　そうじゃなくて、昨日のテレビよ。よくも私の話をしやがったな。
赤星　あれ、見てくれたの？　でも、君に怒られるようなことを言ったっけ？
堀江　高校の同級生で、都内の劇場に勤めてるって言ったら、私だってことはバレバレじゃない。おかげで私はクソババア呼ばわりされてるのよ。
赤星　誰に？
堀江　世界中の人たちによ。あなた、ネットは見ないの？
赤星　仕事でたまに見るぐらいかな。
堀江　松山くん、さっきの画面を呼び出して。
松山　クソババアですね？　了解しました。（パソコンに向かう）
大浦　堀江さん、あんまり大きな声を出すと、ロビーに聞こえますよ。
堀江　平気よ。役者が発声練習でもしてるのかなって思うに決まってる。

そこへ、亀岡がやってくる。

亀岡　誰だ。事務所で発声練習をしてるのは。
大浦　堀江さんです。今、赤星さんに抗議をしてて。
亀岡　堀江さん、君の気持ちはわかるけど、ロビーにはお客さんがいるんだよ。
堀江　わかってます。三分で済ませますから。松山くん、まだ？
松山　出ました。どうぞ。
堀江　（赤星に）ほら、これを見なさいよ。あなたのおかげで、私は知らない人たちから罵詈雑言を浴びてるのよ。
松山　逆に、ファンからは賞賛を浴びてます。
堀江　うれしくない。
亀岡　松山くん、君は受付に戻りなさい。早く。

松山が去る。

赤星　（パソコンを見て）これはひどいな。堀江さんのことを何も知らないくせに、人格まで否定してる。まるで中世の魔女裁判だ。
堀江　こうなったのは誰のせいだと思ってるの？
赤星　きっかけは僕の発言だね。でも、気にしないことだよ。
堀江　何それ。
赤星　面と向かって、悪口を言われたわけじゃない。ネットの中で騒いでるだけじゃないか。君が見なければ、存在しないのと同じだ。
堀江　あなたのせいで、私は名誉を傷つけられた。謝ってよ。
赤星　君の名誉を傷つけたのは、ネットに悪口を書いた人たちだ。僕は何もしてない。

堀江　きっかけを作ったでしょう？

赤星　それを言うなら、最初に約束を破ったのは君じゃないか。君がプロポーズを受け入れていれば、こんなことにはならなかった。

堀江　私が悪いって言うの？

赤星　そうじゃない。僕を責めるのは筋違いだって言ってるんだ。

亀岡　赤星さんの考えはよくわかりました。しかし、堀江さんの上司としては、この騒ぎを黙って見過ごすことはできません。堀江さんのために、昨日の発言を取り消してもらえませんか。

赤星　事実を否定しろって言うんですか？

亀岡　あなたが堀江さんのことを愛しているなら。

赤星　わかりました。ただし、交換条件があります。堀江さん、僕と十二月二十四日にデートしてほしい。

堀江　デート？　あなたって人はよくもまあヌケヌケと。

亀岡　（赤星に）いいでしょう。デートしましょう。

堀江　支配人、勝手なことを言わないでください。

亀岡　いいじゃないか、一日ぐらい。（赤星に）ただし、今は公演中なんです。夕方までに、彼女をここに送り届けてもらえますか？

赤星　もちろん、そのつもりでした。僕はその日のチケットも買ってあるので。（携帯電話を取り出して）勤務先からメールが来た。すぐに戻ってこいって。悪いけど、今日はこれで帰る。デートの待ち合わせの時間と場所は後で電話するから。

赤星が去る。

大浦　あの人、一昨日も本番直前に帰っていきましたよ。
亀岡　サラリーマンが毎日劇場に通うのは難しいはずだ。堀江さんのことがよっぽど好きなんだろうな。
堀江　支配人はどっちの味方なんですか？
亀岡　デートの件については謝る。でも、君がこれ以上エキサイトしたら、ロビーのお客さんに気づかれると思ったから。
大浦　要するに、劇場を守りたかったんですね。
亀岡　そうじゃなくて、お客さんにイヤな思いをさせたくなかったんだ。
大浦　（堀江に）こうなったら、できるだけお金を使わせてやりましょう。最高級のレストランで食事を奢らせるんですよ。
堀江　服も買わせる。靴もバッグもアクセサリーも買わせる。
亀岡　堀江さん、君はネットに書かれた通りの人になってきてるよ。
堀江　いいんです。十二月二十四日の一日だけは、クソババアになってやる。

②柿本の家。久里子が椅子に座っている。手にはウィスキーの瓶とグラス。そこへ、柿本がやってくる。

柿本　ただいま。それ、お父さんがクリスマスに飲もうと楽しみにしていた、マッカランじゃないか。
久里子　私が飲んじゃ悪い？
柿本　いや、お父さんもおまえが買ってきたプッチンプリンを食べたことがあるから、オアイコだ。でも、おまえにマッカランのうまさがわかるのか？

久里子　味なんかどうでもいいの。今は思いっきり酔っ払いたい気分なの。
柿本　長坂くんと何かあったのか？
久里子　おめでとう、お父さん。何もかも、お父さんの狙い通りになったよ。
柿本　狙い通り？
久里子　お父さんは私たちの結婚を何とかして阻止したかった。でも、頭ごなしに反対しても、反発される。だから、武史さんに役者を辞めろって言ったんでしょう？　そう言えば、武史さんが結婚を諦めるだろうと思って。
柿本　諦めたのか、彼は？
久里子　してやったりって思ってるでしょう？　あー、頭に来る。この瓶、絶対空にしてやる。
柿本　よし、今夜は飲みたいだけ飲め。それで、彼のことはきっぱり忘れるんだ。
久里子　お父さん、何言ってるの？　私たち、別れてないよ。
柿本　そうなのか？
久里子　私たち、付き合い始めたのは先月からだけど、知り合ったのは三年前なの。私が初めてジムに行った日。私は一目で好きになって、あの人に会うために毎日通って、でも、話をするチャンスはなかなかなくて、それなのに、筋肉はどんどんついて。
柿本　なぜそこまで彼のことを。彼のどこがそんなにいいんだ。
久里子　何もかもよ。生真面目で、馬鹿正直で、不器用で、でも、一度決めたことはどんなに辛い思いをしてもやり通す。気弱そうに見えるけど、本当は誰よりも強い人なの。
柿本　それにしては、おまえとの結婚はあっさり諦めたな。
久里子　それは役者を続けるためよ。あー、いくら説明しても、お父さんにはわから

ない。お母さんがいたら、きっと賛成してくれたのに。お母さんはいつも私の味方だった。

柿本　お父さんだって、おまえの味方だ。

久里子　女の気持ちは女にしかわからないの。もういい。お風呂に入ってくる。

久里子が去る。

柿本　確かにそうだな。女の気持ちは女にしかわからない。久里子には母親が必要だったんだ。

楽屋口。大浦がやってくる。反対側から、小林がやってくる。

小林　明日美。

大浦　信じられない。ここでずっと待ってたの？

小林　だって、まだ話の途中だっただろう？

大浦　私はしばらく会いたくないって言ったはずよ。

小林　俺は二度と掏摸はやらない。ライターからも足を洗って、親父の会社に就職する。親父にもそうしろって言われたし。だから、もう一度、俺とやり直してくれ。

大浦　そんな話が信じられると思う？

小林　信じてもらえないなら、この指を折る。

大浦　初めて会った時、あなたは私のお財布を拾ってくれたよね？　あれも、本当は私から掏ったんでしょう？

小林　ああ。でも、すぐに返したじゃないか。
大浦　それは中身が少なかったからでしょう？　確か、あの時は千円ちょっとしか入ってなかった。どうしてだか、わかる？
小林　いや。
大浦　私の家は母子家庭で、私には弟が一人、妹が二人いるの。弟たちはまだ学校に通ってて、だから、私の家族は母と私のお給料で生活してるの。
小林　明日美。
大浦　お父さんの会社に入れば、すぐに高いお給料がもらえるようになる。もしあなたがそう考えているんだとしたら、私には許せない。どうして自分一人の力で、一からやり直そうと思わないの？

大浦が去る。
楽屋。波方がセリフの練習をしている。そこへ、亀岡がやってくる。

亀岡　まだいたんですか？　他の人はみんな帰りましたよ。
波方　私のことは気にしないで、先に帰って。
亀岡　そういうわけには行きませんよ。いつもは一番に帰るのに、珍しいですね。
波方　今日、五場の途中で、一瞬頭が真っ白になったのよ。もちろん、すぐに思い出したけど、あんな思いは二度としたくない。
亀岡　帆奈さんの熱心さには頭が下がります。しかし、衣裳の件は驚きました。せっかく自分で作ったのに、よく諦められましたね。
波方　役者はやっぱり演技で勝負しなきゃ。というのは表向きで。
亀岡　え？　裏には別の理由があったんですか？

波方　昨夜、息子からメールが来たのよ。二十四日に見に来るって。
亀岡　それはよかった。息子さん、今、おいくつでしたっけ？
波方　中学二年。父親よりずっとイケメンなのよ。写真見る？（携帯電話を差し出す）
亀岡　（見て）本当だ。あの赤ちゃんがこんなに大きくなるとはねえ。
波方　離婚した直後は、週に一度は会ってたんだけどね。今は年に一度。私の誕生日に食事するだけ。だから、どうしても見に来てほしくて、何度も何度もメールしてたの。
亀岡　なるほど。帆奈さんの熱心さは、息子さんに見せるためだったんですね。
波方　それだけじゃない。テレビ局や映画会社の人間にギャフンと言わせたかったし、あなたの期待に応えたかった。
亀岡　僕のことはどうでもいいですよ。それより、息子さんに「ママって凄いね」って言わせてやりましょう。
波方　そういうことだから、先に帰って。私はもう少し稽古していく。
亀岡　よかったら、お相手しましょうか？
波方　あなたが？
亀岡　五場は、長坂くんとイヤになるほど稽古しました。僕がやったのは、帆奈さんの役でしたけど。
波方　プロデューサーの演技力、見せてもらおうじゃないの。「二人きりになってしまったわね」
亀岡　「そうですね」
波方　「直接お話するのは初めてよね」
亀岡　「私が映画の中で口をきくのは、警部殿だけですから」

波方　「もう一カ月も同じ映画に出てるのにね」
亀岡　「こうして二人きりで話をしてると、まるで主役にでもなった気分ですね」
波方　「どう？　みんなが戻ってくるまで、私たちだけで映画をやらない？」
亀岡　「二人だけで、ミステリーができますか？」
波方　「野暮なことは言わないの。男と女が二人きりなんだから、当然、恋愛映画よ」

亀岡・波方がダンスする。

①十二月二十四日朝、新居浜の家の前。風呂木がやってくる。

風呂木　そして、一週間後の十二月二十四日。カトリックの暦では、一日は日没から日没まで。つまり、日没と同時に日付が変わります。十二月二十四日は日没と同時に二十五日になる。この日没から午前零時までが、クリスマスイブです。今はまだ朝なので、クリスマスイブじゃない。でも、新居浜希乃さんにとっては、待ちに待った朝でした。

ドアを開けて、新居浜・希乃が出てくる。

新居浜　風呂木さん、聞いてください。この子ったら、今日は一人で行くって言うんですよ。

希乃　私はもう大丈夫。昨日だって、一人で買い物に行ってきたし。

新居浜　ほんの一時間か二時間じゃない。一人で半日も出かけたことはないでしょう？

希乃　今日は一人じゃない。広務さんも一緒だよ。

新居浜　でも。

風呂木　お母さん、希乃さんの言う通りにしてあげましょう。（希乃に）ただし、夕方までに必ず帰ってくるんだよ。

希乃　わかってます。（新居浜に）本当に心配しないで。いざとなったら、広務さんを置いて、帰ってくるから。じゃ、行ってきます。

希乃が去る。

新居浜　娘が小学校に入学して、初めて一人で登校した時のことを思い出しました。

風呂木　泣きましたか？

新居浜　ええ。娘の姿が見えなくなった途端に、涙がボロボロ出てきて。風呂木さん、娘に気づかれなければ、尾行しても構わないですよね？

風呂木　ダメです。今日は家で留守番しててください。

駅。堀江がやってくる。反対側から、赤星がやってくる。

赤星　おはよう。五分遅刻だったけど、別に気にしなくていいよ。

堀江　何、その言い方。五分ぐらいで目くじら立てないでよ。

赤星　朝っぱらから機嫌が悪いね。僕とデートするのがそんなにイヤ？

堀江　義理チョコをあげたことは何度もあるけど、義理デートは生まれて初めて。今までで最悪のクリスマスになりそうな予感。

赤星　僕はこの日が来るのを十五年前から楽しみにしてた。

堀江　前から聞きたかったんだけど、私のことがそんなに好きなら、どうして一度も連絡してこなかったの？

赤星　連絡できるわけないじゃないか。僕は振られたんだから。

堀江　なんだ。振られたって自覚はあったんだ。だったら、どうして今頃になって？

赤星　詳しい話は目的地に着いてからにしよう。
堀江　目的地って？　今日はこれからどこへ行くの？
赤星　僕の職場。
堀江　ちょっと待ってよ。今日は休みを取ったんじゃないの？
赤星　仕事をしに行くんじゃない。君に見せたいものがあるんだ。

赤星・堀江が去る。希乃がやってくる。反対側から、土居がやってくる。

希乃　広務さん、おはようございます。
土居　早いね。約束の時間まで、まだ五分もあるよ。
希乃　誘った方が遅刻するわけには行かないから。
土居　今日は夕方から雨になるみたいだよ。傘は———
希乃　持ってきましたよ。天気予報はこまめにチェックしてたんで。
土居　僕は忘れた。さっき、電車の中の天気予報で、初めて知ったんだ。
希乃　じゃ、途中で買っていきましょう。
土居　どうだろう、希乃ちゃん。真冬の海岸で雨が降り始めたら、僕たち凍死するかもしれないよ。だから———
希乃　ホッカイロも買っていきますか？
土居　懐かしいな、この噛み合わない会話。君って人は、いつもこうやって、僕の言いたいことを早とちりした。
希乃　え？　ホッカイロじゃなくて、マフラーですか？
土居　もういいよ。僕は覚悟を決めた。由比ヶ浜へ行こう。
希乃　結局、どっちを買うんですか？　広務さん？

土居・希乃が去る。
松山の家の前。時枝・松山がドアから出てくる。時枝の手には封筒。

松山　じゃ、おばあちゃん、行ってくるよ。
時枝　待ちなよ、進矢。私は芝居なんか見たくないよ。（封筒を差し出す）
松山　そう言わないで。その封筒の中に、チケットと地図が入ってる。迷子になったら、僕のケータイに電話して。すぐに迎えに行くから。
時枝　でも、こんな寒い日に外へ出たら、風邪を引いちまうよ。おまえがしようとしてることは老人虐待だよ。
松山　おばあちゃんはこの前言ったじゃないか。若さがほしいって。
時枝　芝居と若さに、何の関係があるんだい。
松山　おおありだよ。芝居を見ると元気になる。さすがに三十歳は無理だけど、十歳は若返るんだ。
時枝　七十八が六十八になっても、大してうれしくないね。
松山　芝居が終わった後は、おいしい日本酒をご馳走するよ。この前、支配人に連れていってもらったお店、酒好きの間では有名らしいんだ。
時枝　それを先に言いなよ。うまい酒が飲めるなら、行くしかないじゃないか。

松山が去る。時枝がドアを閉める。そこへ、柿本がやってくる。手には紙袋。チャイムを鳴らす。時枝がドアを開ける。

時枝　どなた？

柿本　突然、お邪魔して、申し訳ありません。私は――――
時枝　ニュース・プラネットの柿本光介？
柿本　そうです。実は折入って、お聞きしたいことがありまして――――
時枝　いつも見てるよ、あんたの番組。私はあんたがテレビに出始めた頃からずっとファンだったんだ。いやあ、テレビで見るより、いい男だね。でも、なぜあんたが私の家へ？
柿本　私は新居浜文子さんのお宅を探しているんですが。
時枝　新居浜さんなら、お隣だよ。あんた、あの人と知り合いなの？
柿本　ええ、まあ。それじゃ、またテレビでお会いしましょう。

時枝がドアを閉める。柿本が隣の家のチャイムを鳴らす。新居浜がドアを開ける。

新居浜　柿本さん、どうしてここへ？
柿本　あなたにどうしてもお礼が言いたくて。先日は本当にお世話になりました。（封筒を差し出して）これ、お借りしていたお金です。（紙袋を差し出して）それから、こっちはクッキーです。よかったら、召し上がってください。
新居浜　（受け取って）ありがとうございます。でも、どうしてここがわかったんですか？
柿本　この前、ジブリ美術館の近くだって言ってたじゃないですか。それで、後は虱潰しに。
新居浜　この近所を一軒一軒回ったんですか？　柿本さんが？
柿本　仕事に行く前とか、終わってからとか。意外と早く見つかって、ホッとしました。うう。（震える）

新居浜　寒いんですね？　ごめんなさい、気がつかなくて。どうぞ、中に入ってください。今、熱いお茶を淹れますから。

柿本　いいんですか？

新居浜　一人で暇を持て余してたんです。よかったら、ゆっくりしていってください。

②電車。土居・希乃が座席に座っている。土居の手には携帯電話と傘。

土居　（携帯電話を見て）大船で横須賀線に乗り換えて、鎌倉で江ノ電に乗り換えて、由比ヶ浜で降りよう。所要時間は一時間二十二分。

希乃　それなら、お昼までに着きますね。

土居　去年は三時間もかかったのに。やっぱり、君の言う通り、電車にするべきだった。

希乃　でも、私、車で出かけるのも大好きでしたよ。

土居　新潟へ行った時のこと、覚えてる？　途中で雪が降り始めて、サービスエリアの駐車場で一晩過ごして。

希乃　結局、そこからUターンして帰ったんですよね。

土居　やっぱり、君の言う通り、上越新幹線にするべきだった。

希乃　何だか、付き合ってた頃の反省会みたいになってきましたね。

土居　君に振られた直後は、毎日一人で反省会をしてた。振られる理由が全然わからなかったから。

希乃　それは、仕事が忙しくなったって。

土居　それが嘘だってことはわかってた。それまでだって、どっちが忙しくなっても、何とか時間を作って会ってた。一時間でも二時間でも。それができなく

なったってことは、気持ちが冷めたってことだと思った。

希乃　それは誤解です。

土居　自分の何がいけなかったのか、何日も何日も考えたよ。そうしたら、山ほど理由が見つかった。僕は短気で、理屈っぽくて、自分のことしか考えてなくて、たぶん君を何度も傷つけた。

希乃　そんなことはありません。

土居　だから、わからなかった。こうしてまた君が会いに来てくれたことが。

新居浜の家。柿本が椅子に座っている。そこへ、新居浜がやってくる。手には急須と湯飲み茶碗二つを載せたお盆。

新居浜　さあ、どうぞ。熱いですから、火傷しないように、気をつけて。

柿本　いただきます。（お茶を飲んで）あつ。

新居浜　もうすぐお昼ですけど、お仕事には行かなくていいんですか？

柿本　今、会社に電話しました。今日は入りが遅れるって。僕のことより、新居浜さんは？　僕なんかの相手をしてていいんですか？

新居浜　私は保育園に勤めてるんですけど、三週間ほどお休みをいただいたんです。

柿本　保育園てことは、保育士さんですか？

新居浜　ええ、短大を卒業してからずっと。

柿本　失礼ですが、ご結婚は？

新居浜　しましたよ、二十五の時に。相手は一回りも上の人で、親に大反対されたんですけど、駆け落ち同然で一緒になりました。でも、結婚して十年目に、「好きな人ができたから、別れてくれ」って。

柿本　それはひどい。やっぱり、一回りも上の男と結婚するべきじゃない。
新居浜　柿本さんは奥さんを亡くされてるんですよね？
柿本　ええ、十二年前に病気で。（携帯電話を差し出して）これが妻です。
新居浜　（見て）信じられない。本当に私そっくり。
柿本　初めて病院で見た時は、心臓が止まるかと思いました。顔だけじゃなくて、声も話し方も似てた。だからつい、お名前を聞いてしまったんです。
新居浜　奥さんのお名前は？
柿本　はるかです。
新居浜　柿本さん、私は新居浜文子です。はるかさんじゃありません。
柿本　わかっています。僕はあなたのことを何も知らない。だから、もっと知りたくて、こうして訪ねてきたんです。
新居浜　私には娘が一人います。名前は希乃と言います。

①十二月二十四日昼、病院のロビー。赤星・堀江がやってくる。

堀江　ちょっとちょっと、病院なんかに何の用なの？

赤星　だから、ここが僕の職場なんだよ。

堀江　てことは、まさか、お医者さん？　でも、この前はサラリーマンて言ってなかった？

赤星　僕はこの病院からサラリーをもらってる。嘘はついてない。

堀江　ちょっと待って。あなた、大学は文学部じゃなかった？

赤星　一年の時、兄が事故で亡くなってね。僕の家は代々、病院をやってて、父の跡は兄が継ぐはずだった。でも、兄の死で、僕にお鉢が回ってきたってわけさ。

堀江　じゃ、小説は？

赤星　残念ながら、執筆に割ける時間は一瞬もなくなった。でも、一年前にある患者さんと出会ってね。彼女と話をしているうちに、もう一度書こうって思うようになった。エレベーターに乗ろう。君に見せたいものは七階の談話室にある。

赤星・堀江が去る。

駅。土居・希乃がやってくる。

土居　（携帯電話を見て）ここから由比ヶ浜まで徒歩五分だって。
希乃　よかったですね、雨が降り出さなくて。
土居　それは時間の問題じゃないかな。この空模様だと、いつ降り出しても、おかしくない。
希乃　じゃ、急いで行きましょう。
土居　希乃ちゃん、君は前にもここに来たことがあるの？
希乃　いいえ、今日が初めてですよ。
土居　でも、君は電車の乗り換えの時に迷わなかったし、今だって真っ直ぐそっちの方へ。
希乃　だって、海は南でしょう？　だったら、こっちですよ。さあ、行きましょう。

土居・希乃が去る。
病院の談話室。赤星・堀江がやってくる。

堀江　今、話をしてた人は？
赤星　内科の部長。僕の上司だよ。「最近、帰りが早いのは、あの女性が原因ですか」って聞かれたんで、「彼女は僕の婚約者です。式の際は仲人をお願いします」って言っておいた。
堀江　それで私の方を見て、ニヤってしたのね？　勝手なことを言うな。
赤星　まあまあ、怒らないで、これを見て。（携帯電話を差し出す）
堀江　（見て）この人は？

赤星　僕が担当していた患者さん。一年前にこの病院に来た時、既に膵臓ガンの第四ステージだった。

堀江　それって、末期だったってこと？

赤星　ガン細胞は周囲のリンパ節、血管、臓器に広がっていて、手術をしても完治は難しいと思われた。僕はこのことを本人に正直に話した。

堀江　ショックだったでしょうね。

赤星　でも、彼女は冷静に受け止めた。そして、すぐに入院して、治療を開始した。彼女の五年後生存率は三、七パーセント。その三、七パーセントに賭けたんだ。

堀江　それで、その賭けには勝てたの？

赤星　彼女の枕元には、写真立てが置いてあった。その写真には、彼女と彼女の恋人らしき人が写っていた。でも、その人が見舞いに来ることはなかった。僕はある日、彼女に聞いてみたんだ。この人は来ないんですかって。すると彼女は、入院する前に別れたと言った。彼を巻き込みたくなかったので、仕事が忙しくなったと言って、別れたって。

堀江　病気のことを隠して？

赤星　僕は彼に話すべきだと言った。

堀江　当然よ。私だったら、絶対に言う。一人で病気と戦うなんて、辛すぎる。

赤星　でも、彼女は僕の言葉に耳を貸さなかった。そして、絵を描き始めた。この絵もその一枚だよ。（指差す）

堀江　（見て）海。

海岸。土居・希乃がやってくる。

希乃　今日はサーファーはいませんね。
土居　寒いからだよ。やっぱりホッカイロを買っておくんだった。
希乃　あれ？　雨かな？
土居　もう、最悪だ。（傘を差しながら）これで約束は果たした。途中にあった蕎麦屋で温かい蕎麦を食べて帰ろう。
希乃　（傘を差しながら）いいですよ。でも、せっかく来たんだから、少し散歩してからにしましょう。
土居　雨の中を？　君はやっぱり僕を凍死させたいんだな？
希乃　私はこの日が来るのを一年半も待ってたんです。泣き言を言わないで、ついてきてください。

土居・希乃が去る。

病院。

赤星　彼女は美大の出身で、デザイン事務所に勤めてたんだよ。最初の頃はスケッチブックに鉛筆でデッサンしてた。見舞い客にもらった花とか、窓から見える景色とか。美大に行ってただけあって、とても上手だった。そのうち、彼女は油絵を描き始めた。
堀江　これはどこの海？
赤星　さあ。聞いたけど、教えてくれなかった。
堀江　どこかで見た気がするんだけど。
赤星　そう思うだろう？　だから、しつこく聞いたんだ。そうしたら、自分は行っ

堀江　たことがないって。
この世には存在しない海なの？
赤星　違う。行きたかったけど、行けなかった海なんだ。
堀江　もしかして、彼と行くはずだったの？
赤星　その時、僕は君を思い出した。いや、別に忘れてたわけじゃないんだけど、僕は一人前の医者になるのに必死で、君のことは先送りにしてた。でも、もし今、僕の五年後生存率が三、七パーセントだと言われたら？　僕は居ても立ってもいられなくなった。
堀江　それで、もう一度、小説を？
赤星　無我夢中で書いたよ。君にどうしても会いたかったから。

赤星・堀江が去る。
②駅。土居・希乃がやってくる。

土居　じゃ、僕はここで降りて、劇場に行くから。
希乃　今日は本当にありがとうございました。私のワガママに付き合ってくれて。
土居　いや、僕は約束を果たしただけだよ。それより、ニューヨークへはいつ出発するの？
希乃　今夜です。
土居　今夜？　じゃ、今から成田へ？
希乃　広務さんと由比ヶ浜へ行けたら、もう何も思い残すことはないので。
土居　それは残念だな。成田まで見送りに行こうかと思ってたのに。
希乃　見送りは、母がしてくれますから。

土居　次に日本に帰ってくるのはいつ？　年に一度ぐらいは帰省するんだろう？
希乃　それはまだわかりません。
土居　帰ってきたら、連絡してくれないか？　いや、向こうで落ち着き先が決まったら、住所を知らせてほしい。僕はまだニューヨークへ行ったことがなくてね。そのうち、芝居を見に行くかもしれない。
希乃　わかりました。
土居　僕が行ったら、迷惑？
希乃　そんなことないですよ。でも、どうせだったら、広務さんが演出したお芝居をニューヨークに持ってきてください。
　　そうだな。それを目標に頑張るよ。じゃ。
て居　広務さん。
希乃　何だい？
土居　一年前に私がしたこと、許してくれますか？
希乃　とっくに許してるよ。君は付き合ってた頃のままだった。次に会う日を楽しみにしてる。じゃ、また。
土居　（うなずく）
希乃

土居が去る。反対側から、柿本・新居浜がやってくる。

新居浜　希乃。
希乃　お母さん、迎えに来てくれたの？　あれ、その人は。
新居浜　今日、家まで訪ねてきてくれたの。あなたのこと、全部話しちゃった。
柿本　（希乃に）初めまして。柿本光介です。

希乃　私、柿本さんには二回会ってます。病院とここで。
新居浜　（希乃に）それで、今日はどうだった？
希乃　楽しかった。凄く、凄く、楽しかった。

そこへ、風呂木がやってくる。

風呂木　希乃さん、これで思い残しはなくなりましたね？
希乃　ええ。三週間も待たせて、申し訳ありませんでした。
風呂木　僕のことなら、気にしないで。実を言うと、今から九十二年前にも同じようなことがあったんです。その時待ったのは三日でしたが。
柿本　（新居浜に）あの、こちらの方は？
新居浜　先程お話しした、風呂木さんです。
柿本　え？　じゃ、この人が天使？　イメージしてたのと全然違う。
風呂木　実体化するに当たって、日本人らしい名前と風貌にしたんです。本名はプロキオンと言います。
柿本　あなたにも前にお会いしてるんですよね？
風呂木　ええ、何回も。私たちは自分の意思で姿を見せたり見せなかったりすることができるんです。希乃さんの場合は、訓練の結果、実体化に成功しましたが。
新居浜　何もかも、風呂木さんのご指導のおかげです。
風呂木　そう言ってもらえるとうれしいです。（希乃に）それじゃ、行きましょうか。
希乃　お母さん、今日までありがとう。
新居浜　私の方こそ、ありがとう。この三週間は、私にとって、最高の時間だった。あなたの心臓が止まった時、もう二度と会えないと思ったのに、こうしてま

た会えて、話もできて、最後のデートのお手伝いもできて。今まで生きてきた中で、一番うれしいプレゼントだった。

希乃　広務さんから電話があったら。

新居浜　わかってる。「ニューヨークで元気にやってるみたいです」って言う。

希乃　悲しまないで。

新居浜　悲しむもんですか。今の私は最高に幸せなんだから。じゃ、またね。

希乃　うん。また会おうね。

希乃・風呂木が去る。

柿本　新居浜さん、僕にも娘が二人います。上の子は去年、結婚しました。下の子はつい先日、結婚したい人がいるって言い出しまして。それが売れない役者で、年が一回りも上で。

新居浜　反対したんですか？

柿本　それだと娘が反発しますからね。悪知恵を絞って、相手の男に諦めさせたんです。

新居浜　かわいそうに。

柿本　時間が経てば、忘れられる。そう思ったんです。でも、もし今、娘の身に何か起きたら、僕は取り返しのつかないことをしたと思うでしょう。僕は間違っていた。そうですよね？

新居浜　でも、まだやり直しはできますよ。娘さんは生きてるんですから。

柿本　希乃さんのおかげで、目が覚めました。僕は今からやり直してきます。

そこへ、小林がやってきて、柿本にぶつかる。柿本がよろめく。小林が柿本のポケットに財布を入れる。

柿本　　君は。

小林が去る。

新居浜　　柿本さん、今の人は。

柿本　　この前、僕の財布を掏った男です。まさか、また。（ポケットから財布を出して）これは一体どういうことだ。この前、掏られた財布だ。

新居浜　　あの人が返してくれたんですよ。でも、なぜわざわざ？

柿本　　たぶん、あの男もやり直そうと思ったんでしょう。今度は僕の番だ。新居浜さん、行ってきます。

新居浜　　行ってらっしゃい。

柿本が去る。

①十二月二十四日夕、劇場の事務所。堀江・大浦が椅子に座っている。そこへ、亀岡がやってくる。

堀江　どうでしたか、支配人？

亀岡　楽屋は空だった。もう一度、電話してみる。（携帯電話をかける）

大浦　そんなに心配することないんじゃないですか？　開演まで、まだ一時間もあるし。

堀江　波方さんはいつも三時間前に来るの。

大浦　今日は前に仕事が入って、それが押しちゃったとか。

堀江　だったら、支配人に連絡が来るはずでしょう？

亀岡　ダメだ。出ない。

堀江　いっそのこと、自宅に迎えに行った方が早いんじゃないですか？

亀岡　あの人の家は二子玉川だ。どんなに車を飛ばしても、三十分はかかる。

大浦　この時間は道が混んでます。三十分じゃ、無理ですよ。

亀岡　あの人に限って、本番に穴を空けることはないと思うが。念のために、自宅にかけてみる。

そこへ、時枝・松山がやってくる。

松山　支配人、すみません。うちの祖母がどうしてもご挨拶したいって言ってまして。

時枝　支配人さんですか？　松山進矢の祖母です。進矢がいつもお世話になってます。

亀岡　初めまして、亀岡です。今日は芝居を見にいらっしゃったんですよね？

時枝　ええ、私は芝居には全然興味がないんですが、進矢に言われて仕方なく。

松山　そのわりに、ずいぶん早く来たじゃないか。

時枝　おまえは口を挟むんじゃないよ。（亀岡に箱を差し出して）これ、よかったら、皆さんで召し上がってください。モンシェールの堂島ロールです。

松山　ありがとう。俺、大好物なんだよ。

時枝　おまえのために買ってきたんじゃないよ。

亀岡　（受け取って）わかりました。進矢くんには一口も食べさせません。

そこへ、柿本がやってくる。

柿本　突然、お邪魔して、申し訳ありません。私は――――

時枝　ニュース・プラネットの柿本光介？

柿本　そうです。あなたは確か、昼間お会いした――――

時枝　なぜ柿本さんがここに？　まさか、私を追いかけて？

柿本　全然違います。失礼ですが、こちらの責任者の方は？

亀岡　私です。支配人の亀岡と申します。

柿本　初めまして、テレビ明後日の柿本です。実は、こちらのお芝居に出演してい

る、長坂武史くんに急用がありまして。できれば、今すぐ会わせていただきたいんですが。

亀岡　長坂くんとはどのようなご関係で？

柿本　彼は私の娘の友人なんです。娘のことで、どうしても話したいことがあって。

亀岡　わかりました。松山くん、呼んできて。

松山　はい、ただいま。

松山が去る。

大浦　堀江さん、柿本さんに何か言いたいことがあるんじゃないですか？

堀江　やめてよ、大浦さん。

柿本　あの、私に何か？

大浦　この前、光介の部屋に赤星一馬さんが出ましたよね？　その時、赤星さんの彼女の悪口を言ったでしょう？

柿本　言ってませんよ。

大浦　嘘嘘。絶対に言いました。

時枝　いや、言ってないよ。柿本さんは赤星さんを励ましただけさ。「挫けちゃダメですよ」って。

柿本　助太刀、ありがとうございます。

時枝　どういたしまして。私は芝居を見た後、特に予定は入ってないよ。

柿本　どうか気をつけてお帰りください。

そこへ、長坂・松山がやってくる。

長坂　支配人、今、楽屋に波方さんが来ました。
亀岡　本当か？
堀江　よかったですね。これで迎えに行かずに済みました。
長坂　でも、ちょっと様子がおかしくて。体の具合が悪そうなんです。
亀岡　何だって？　行こう、堀江さん。

亀岡・堀江が去る。

時枝　波方さんて？
松山　波方帆奈。これからやる芝居に出てるんだよ。
時枝　私も行こう。
松山　どうしておばあちゃんが？　関係者以外は立入禁止だよ。
時枝　私はおまえの祖母。関係者の関係者は関係者だよ。

時枝・松山が去る。

長坂　柿本さん、僕に何か？
柿本　本番直前に呼び出して、すまない。実は君に頼みがあってね。
長坂　久里子さんのことでしたら、ご安心を。結婚の話はナシになりました。
柿本　そのことは久里子から聞いた。君が諦めるって言ったって。でも、本当にそれでいいのか？　後悔はしてないのか？
大浦　あの、もしよかったら、お話の続きは応接室でいかがですか？

長坂　いや、話はすぐに終わりますから。柿本さん、僕は本番の準備があるんで、そろそろ楽屋に戻らないと。

柿本　その前に、僕の質問に答えてくれ。後悔はしてないのか？

長坂　そんなの、してるに決まってるじゃないですか。僕はこの歳になっても、一人前の役者になれない、ダメな男です。そんな僕を、久里子ちゃんは好きだって言ってくれた。結婚しようって言ってくれた。三十五年生きてきて、これほど幸せだと思ったことはありません。

柿本　だったら、僕に何を言われようと、結婚すればいいじゃないか。

長坂　でも、今の僕には、久里子ちゃんを幸せにする自信がない。

柿本　いいか、長坂くん。もし今、別の男がタイムマシンに乗って、過去へ行って、歴史を変えて、久里子と結婚したら、君はどうする。

長坂　そんなの、わかりません。

柿本　そう言わずに、考えてみてくれ。ただし、君が今、過去へ行ったら、たくさんの人に迷惑がかかる。下手をしたら、二度と舞台に立てなくなるかもしれない。それでも、君は過去へ行くか。それとも、久里子のことは諦めるか。

長坂　過去へ行きます。芝居はどこでだってできる。僕は久里子ちゃんを失いたくありません。

柿本　その言葉だけで充分だ。長坂くん、久里子と結婚してやってくれ。この通りだ。（頭を下げる）

長坂　柿本さん。

②楽屋。波方・土居が椅子に座っている。そこへ、亀岡・堀江がやってくる。

亀岡　土居くん、波方さんの具合が悪いって聞きましたが。
土居　見てください。完全に酔っ払ってますよ。ついさっきまで飲んでたって感じです。
堀江　私、お水を持ってきましょうか？
亀岡　波方さん、なぜ飲んだんです。千秋楽まで飲まないって約束したでしょう？
波方　メールが来たの。息子から。今日は行けなくなったって。
亀岡　そうだったんですか。でも、開演は一時間後です。
波方　わかってる。すぐにメイクをする。（立ち上がるが、すぐによろける）
土居　（波方を支えて）無理だ。こんな状態で舞台に立てるわけない。
亀岡　堀江さん、グレープフルーツを二十個買ってきて。
堀江　二十個も？
亀岡　グレープフルーツには果糖とクエン酸が豊富に含まれていてね、肝臓の代謝機能を高める効果があるんだよ。こういうことは前に何度もあった。そのたびにグレープフルーツで乗り切ってきたんだ。さあ、早く。
堀江　行ってきます。

堀江が去る。

土居　（亀岡に）一時間で間に合いますか？
亀岡　絶対に間に合わせてみせます。と言いたいところですが、波方さんももう若くないですからね。肝臓の機能も衰えてるに違いない。念のために、開演を十分遅らせましょう。
波方　やっぱりダメ。まだストレッチもしてないし、喉もあったまってない。私、

亀岡　こんなんじゃ、舞台に立てない。
波方　（波方を支えて）帆奈さん、落ち着いてください。
（亀岡の手を振り払って）放して！　放してよ！

そこへ、時枝・松山がやってくる。

時枝　ちょっとお邪魔しますよ。
松山　おばあちゃん、勝手に入っちゃダメだよ。
時枝　帆奈さん、何をやってるの。返事をしなさい、帆奈さん！
波方　はい！（気をつけの姿勢になる）
時枝　あなたはプロの女優でしょう。あなたの演技を見るために、たくさんの人が集まってきてるのよ。しっかりしなさい。私を言い負かした時の勢いはどこへ行ったの。
波方　松山先生？
時枝　そうよ。卒業式以来だから、三十九年ぶりね。
波方　先生、私、息子に会いたくて。私の演技を見てほしくて。
時枝　そのために今日まで頑張ってきたのね。偉いわ。
波方　でも、息子は行けなくなったって。メールで一言だけ。私のことなんか、もうどうでもいいって。
時枝　バカなことを言うんじゃないの。
波方　でも。
時枝　（波方を抱き締めて）子供っていうのは勝手だもの。時には母親の存在を忘れることもある。でも、あなたが大切に思っていれば、いつかはきっと気づ

く。だって、あなたがいなければ、この世に生まれてこられなかったんだから。

波方　先生。

時枝　自信を持ちなさい、帆奈さん。あなたなら、きっと乗り越えられる。これぐらいのことで取り乱しちゃダメ。

波方　はい。私、顔を洗ってきます。

亀岡　（時枝に）ありがとうございました。

波方・亀岡が去る。

土居　（時枝に）あなたは一体何者ですか？

時枝　通りすがりの塾教師だよ。進矢、ありがとう。

松山　え？　僕が何かした？

時枝　私を教え子に会わせてくれた。おかげで、三十九歳若返ったよ。私にとって、最高のクリスマス・プレゼントだった。

③楽屋口。大浦がやってくる。反対側から、小林がやってくる。

大浦　小林くん、お願いだから、ここに押しかけてくるのはやめて。

小林　待ってくれ、明日美。（大浦の手をつかむ）

大浦　もうすぐ開場時間なの。放して。

小林　一分だけでいいから、俺に時間をくれ。頼む。

大浦　その手を放して。

小林　おまえはこの前、言ったよな？　どうして自分一人の力で一からやり直さないんだって。だから、俺は昨日までの一週間、死に物狂いで働いた。それで今日は朝から駅をうろついて、俺が財布を掏った相手に金を返した。たったの一日だから、三人にしか返せなかったけど。

大浦　そんなこと、できるわけない。

小林　俺も何度も諦めようと思った。でも、そのたびにおまえの顔が浮かんで。

大浦　私の顔が？

小林　俺の親父はハリマの社長だ。そう言えば、大抵のやつは俺の言うことを聞いた。でも、おまえは鼻も引っかけなかった。俺一人で何とかしろって言った。俺だけを見てくれた。

大浦　そんなの、当たり前のことじゃない。

小林　俺は変わる。おまえの言う通り、自分一人の力で一からやり直す。信じてくれ。

大浦　すぐには無理よ。

小林　どうしても信じてくれないなら、この指を折る。

大浦　じゃ、折って。今、ここで。

そこへ、堀江がやってくる。

堀江　大浦さん、開場時間よ。事務所に戻って。

大浦　今、行きます。（小林に）どうしたの？　折れないの？

堀江　あなた、今、なんて言った？

大浦　（小林に）自分一人の力でやり直すんでしょう？

小林が唸り声を上げながら右手の指を曲げる。大浦が小林の腕に飛びつく。

小林　放せ！
大浦　もういい。
小林　よくない。まだ折れてない。
大浦　折るかわりに、私にちょうだい。この指、私にちょうだい。
小林　指を詰めろって言うのか？
大浦　詰めなくていい。でも、これはもう私のもの。わかった？
小林　わかった。おまえにやるよ。俺からのクリスマス・プレゼントだ。
大浦　（うなずく）
堀江　仕方ないな。あなたの分も、私が働くから、ここでゆっくりしてて。

堀江が去る。

①十二月二十四日夜、劇場の事務所。亀岡が椅子に座っている。そこへ、松山がやってくる。

松山　支配人、またフェイスブックですか？
亀岡　今日で七日連続の大入り満員だ。報告しないわけには行かないだろう。
松山　明日のチケットはもう売り切れてるし、今年最高の稼働率になったんじゃないですか？
亀岡　今頃気づいたか。いろいろ大変なことはあったけど、まずは大成功と言っていいだろうな。
松山　これだけ当たったんだから、すぐに再演した方がいいんじゃないですか？
亀岡　そのことについてはもう考えてる。でも、まだ誰にも言うなよ。
松山　二人だけの秘密ですね。
亀岡　それはイヤだな。後で堀江さんと大浦さんにも言おう。

そこへ、土居・時枝がやってくる。

土居　松山くん、おばあちゃんをお連れしたよ。
松山　（時枝に）どうだった、芝居は？　楽しめた？

時枝　私には芝居のよしあしはわからないけど、飽きずに見られたよ。帆奈さんもよく頑張ってた。

土居　波方さんが舞台に立てたのは、あなたのおかげです。本当にありがとうございました。

時枝　私は何もしてないよ。それより、帆奈さんのこと、これからもよろしくお願いします。あの子は鼻っ柱が強いけど、根は優しい子なんだ。だから、あの子の気持ちをよく汲み取ってあげて。

土居　はい、松山先生。

時枝　いい返事だ。じゃ，私はこれで帰りますよ。

松山　僕も一緒に帰るよ。（亀岡に）お先に失礼します。

時枝・松山が去る。そこへ、堀江がやってくる。

堀江　松山くんのおばあちゃん、お帰りになったんですね？

土居　元気な方ですね。今でも自宅で塾をやってるって仰ってました。

亀岡　松山くんは小学生の時、両親を交通事故で亡くしましてね。あのおばあちゃんに育てられたんです。おばあちゃん子は三文引けって言いますけど、彼は例外ですよ。普通の家の子より、よっぽどしっかりしてます。

堀江　それ、本人に言ってあげたら、きっと喜びますよ。

亀岡　絶対に言わない。僕もあのおはあちゃんを見習って、彼を厳しく躾けることにした。

堀江　いいですね。私も協力します。

土居　僕も協力します。あ、僕がここに来るのは、明日まででしたね。

亀岡　お客さんはみんな帰ったかな。（堀江に）ちょっとロビーを見てくる。

亀岡が去る。そこへ、柿本・久里子・長坂がやってくる。

柿本　（堀江に）今日は突然お邪魔して、申し訳ありませんでした。おまけに、お芝居まで見せていただいちゃって。

堀江　調光室からだと、見づらかったんじゃないですか？

柿本　いやいや、タダで見せていただいたんだから、文句は言えません。それに、照明さんの方の仕事ぶりが見られて、ちょっと得した気分です。

久里子　私に言ってくれれば、チケットをあげたのに。

柿本　おまえはできるだけ近くで武史くんが見たいだろうと思って。

久里子　でも、どうして今日、急に見に来たの？　しかも、私に黙って。

柿本　彼に話したいことがあってね。

久里子　話したいことって？

柿本　実は昼間、新居浜さんて人に会って、不思議な話を聞いたんだ。その人の娘さんは今から三週間ほど前に膵臓ガンで亡くなった。でも、どうしてもやりたいことがあって、天国へ行くのを先延ばしにした。

久里子　それはつまり、幽霊になったってこと？

柿本　ああ。でも、訓練して、実体化に成功したんだ。

久里子　バカバカしい。そんなことあるわけないじゃない。

長坂　まあまあ、久里子ちゃん。（柿本に）で、その人のやりたいことって、何だったんですか？

柿本　好きな人と海へ行くこと。生きてる間に約束したのに、行けなかったんだそ

長坂　うだ。
久里子　わかるなあ、その気持ち。
柿本　（柿本に）で、その話と武史さんと、何の関係があるの？
土居　だから、つまり。
柿本　ちょっと待ってください。今の話をもう少し詳しく話していただけませんか？
土居　あれ、あなたは。
　今日の芝居を演出した、土居広務です。ニュース・プラネットの柿本光介さんですよね？　初対面で、いきなり不躾な質問をして、すみません。でも、僕はどうしても知りたいんです。
柿本　今のはあくまでも人に聞いた話で、事実かどうかはわかりません。
堀江　私もそれとよく似た話を聞きましたよ。別の人って可能性もあるけど。
土居　それでも構わないから、教えてください。三週間前に亡くなった女性の名前は？
堀江　名前は聞いてません。でも、私はその人が描いた絵を見せてもらって、右下の所に、ローマ字で「ＫＩＮＯ」ってサインが。
土居　ＫＩＮＯ。希乃。（うつむく）
長坂　土居さん、どうかしたんですか？
土居　どうやら僕はまた失恋してまったようです。でも、かわりに最高のクリスマス・プレゼントをもらいました。お先に失礼します。

土居が去る。

久里子　どうしたの、あの人？

柿本　（堀江に）まずいですよ。希乃さんは土居さんに本当のことを知られたくなかったんだ。
堀江　そうなんてすか？
柿本　急いで、新居浜さんに電話しないと。（携帯電話を取り出す）

そこへ、亀岡がやってくる。

亀岡　（堀江に）お客さん、みんな帰ったよ。
長坂　それじゃ、僕らもお先に失礼します。

そこへ、波方がやってくる。

波方　長坂くん、待って。
長坂　僕に何か？
波方　今日はあなたに本当に助けられた。感謝してる。
長坂　そんな。僕は何も。
波方　私が台本と違うことを言っても、ちゃんと返してくれたでしょう？　おかげで、最後までやり通すことができた。この恩は一生忘れない。
長坂　波方さんに褒めていただけるなんて、感激です。
波方　でも、あなたはもっとよくなる。明日も期待してるからね。
長坂　わかりました。お疲れさまでした。

柿本・久里子・長坂が去る。

波方　亀岡くんにもお礼を言わなくちゃ。亀岡特製グレープフルーツ・ジュース。
亀岡　久しぶりに飲んだけど、やっぱり効いたわ。
波方　お役に立てて、何よりです。でも、あのジュースはあれで最後ですからね。
亀岡　わかってる。今夜は絶対に飲まない。
波方　明日は千秋楽です。最高の演技を見せてください。期待しています。
亀岡　あんた、私のことが本当に好きなんだね。
波方　当たり前じゃないですか。僕は小学生の頃から、波方さんのファンだった。
亀岡　波方さんは僕の初恋の人なんです。
波方　そこまで言われたら、私も覚悟を決める。結婚してあげるよ。
亀岡　え？　今、なんて？
波方　だから、結婚してあげるって言ったの。
亀岡　ちょっと待ってください、帆奈さん。僕には妻も子供もいますよ。
波方　そうだったっけ？
亀岡　僕のこと、何も知らないのに、よく結婚なんて言えましたね。
堀江　まだお酒が残ってるんじゃないですか？
波方　そうかもしれない。前の旦那の時も、酔っ払って、ひどいことを言って、家を追い出されたんだ。
亀岡　だから、酒はやめてくれって言ってるんです。帆奈さん、僕はこの芝居を来年もやりたいと思っています。よかったら、また出てくれませんか？
波方　ありがとう。でも、仕事の話の事務所を通して。
亀岡　了解です。
波方　それじゃ、明日もよろしく。お疲れさま。

堀江が去る。そこへ、大浦がやってくる。

大浦　役者さん、スタッフさん、全員帰りました。
亀岡　それじゃ、僕らも帰ろうか。大浦さんはこの後、彼氏とデート？
大浦　当然ですよ。クリスマスイブですから。
亀岡　堀江さんは？　そう言えば、昼間のデートはどこへ行ってきたの？
堀江　絵を見てきました。海の絵を。
大浦　で、この後は？　ディナーの約束はしなかったんですか？
堀江　しなかった。
亀岡　さっき、ロビーに出た時、赤星さんに会ったよ。「明日も来ます。明日で最後かと思うと、何だか寂しいです」って。僕は何も口出ししない。でも、君の幸せを祈ってるよ。
堀江　ありがとうございます。それじゃ、お先に。

堀江が去る。

亀岡　大浦さん、堀江さんの幸せを祈ろう。
大浦　ついでに、公演の成功と大入り満員も祈りましょう。
亀岡　（祈って）よし、あとは家に帰って、家族でクリスマスパーティーだ。

②楽屋口。風呂木がやってくる。

風呂木　雨は夕方止みました。やがて、日が暮れて日付は二十五日。いよいよクリスマスイブの本番です。僕は新居浜希乃さんを天上へ送り届けると、再び東京へ舞い戻りました。この二週間のうちに出会った人々がどんなクリスマスイブを過ごすか、見届けるために。僕にできることは黙って見守ることだけ。幸せになれかどうかは、その人次第なのです。

そこへ、堀江がやってくる。反対側から、赤星がやってくる。傘を差して、手には花束。

赤星　（花束を差し出して）メリー・クリスマス。

堀江　嘘。また降り出したの？

赤星　ついさっき。凍え死にする前に、受け取ってくれないか？

堀江　（受け取って）あなたの小説、読んだよ。『八方美人にさよならを』。

赤星　どうだった？

堀江　あれのどこが小説？　十五年前の出来事を、そのまま書いただけじゃない。

赤星　処女作っていうのは大抵の場合、自分の経験を書くんだよ。

堀江　難しい小説じゃないけど、どうしてもわからないことがあった。主人公の男の子は、どうして彼女を好きになったわけ？

赤星　それは読者一人一人に自由に読み取ってほしい。

堀江　私には何も読み取れなかった。だって、彼女は八方美人だし、底意地は悪いし、すぐにカッとなってひどいことを言うし。

赤星　そんなの、大した欠点じゃないよ。

堀江　でも、いい所は一つもない。だから、十五年後は、クリスマスイブを一緒に過ごす恋人も友達もいなくなるのよ。

赤星　僕がいるよ。
堀江　あなたは恋人でも友達でもない。大体、あなた、私のこと、一度も好きだって言ってないじゃない。十五年前も今も、結婚してくれだけだよね？
赤星　そうだっけ？
堀江　言いなさいよ。好きだって。
赤星　言ったら、結婚してくれる？
堀江　いいから、言いなさいよ。早く。
赤星　堀江恭子さん、僕はあなたが好きです。
堀江　それだけ？　世界で一番とか、永遠にとか、修飾語はつかないの？　小説家のくせに、ボキャブラリーが貧困じゃない？
赤星　わかった。今から修飾語を千個言うから、耳をかっぽじって、よく聞け。
堀江　（空を見上げて）あれ？　雪？
赤星　一つ目。真っ白い雪よりも清らかな気持ちで、あなたを愛しています。
堀江　何それ？　中学生の初恋じゃあるまいし。
赤星　じゃ、二つ目。北海道大雪山の万年雪を溶かすほど熱い気持ちで、あなたを愛しています。
堀江　大雪山？　スケールが小さい。
赤星　じゃ、三つ目。南極大陸の氷を全部溶かすほど熱い気持ちで、あなたを愛しています。
堀江　それは困る。モルジブが沈んじゃう。
赤星　じゃ、四つ目。

赤星が話し始める。堀江が笑いながらそれを聞く。遠くで、風呂木が二人を見ている。

三人の上に雪が舞い落ちる。

<幕>